

# 2025(令和7)年上半期の わが国周辺の漁海況の特徴について

---

## 目次

---

要約ー2025年上半期のポイント .....	1
1. わが国周辺の海況 .....	4
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向 .....	7
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ・さば類・マアジ .....	9
(2)カツオ・ビンナガ .....	10
(3)スルメイカ・アカイカ .....	11
4. トピックス .....	14

---

2025年8月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター  
(JAFIC)

## 要約－2025年上半期のポイント

### ● 総括

- ・黒潮大蛇行が本年4月に7年9カ月ぶりに、また黒潮続流の北偏も約2年ぶりに解消した。後者に伴い、親潮・混合域の異常な高水温も収まった。
- ・JAFIC調査港における2025年1～5月の水揚量は、前年同期比106%の67万トン、平均価格は前年同期比95%の215円/kgで、過去5年平均を上回ったが、価格の上昇は落ち着きつつある。
- ・日本近海の主要魚介類の水揚量の減少傾向が長引く中で、ビンナガが好漁、マイワシは前年同期をやや上回り、スルメイカの水揚量は過去最低だった前年同期をやや上回った。前年に続いて太平洋側のマサバは不漁が続いたが、東シナ海・日本海側のさば類の水揚量は前年同期を上回った。海洋環境の変動に伴い、各魚種の回遊に変化が見られた。

### ● わが国周辺の海況

- ・黒潮続流の北偏が約2年間ぶりに解消され、親潮の面積も4月には平年並みに回復し、親潮・混合域の著しい高水温は解消された。
- ・黒潮大蛇行が4月に7年9カ月ぶりに解消して、黒潮流路の変動にともない海面水温が大きく変動した。
- ・対馬暖流は冬季前半にはかなり強めであったが、春季前半は平年よりかなり弱めになり、日本海西部の海面水温は低めであった。
- ・6月以降は、親潮の面積が縮小し、対馬暖流の勢力も平年並みに回復した。また、日本各地で6月としては過去最高の気温を記録した影響もあり、日本周辺の海面水温は昇温が進み、広範囲で高めになった。

### ● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・JAFIC調査港における2025年1～5月の調査対象全魚種の累計水揚量は、66万8千トンで、前年同期比106%、過去5年平均比92%と、前年をやや上回った一方で、過去5年平均を下回った。平均価格は215円/kgで、前年同期比95%、過去5年平均比111%と、前年並みにとどまったものの、過去5年平均を上回った。
- ・主要魚種について価格と水揚量の関係を前年同期と比較すると、水揚量が減少し、価格が上昇した魚種が多く見られた。
- ・魚価の高止まり傾向は継続しており、円安や燃油・資材価格の高騰などが影響していると考えられるが、価格の上昇は落ち着きつつある。

### ● マイワシ

- ・マイワシの全国主要港における1～6月の水揚量は31.2万トン(太平洋側24.0万トン、日本海側7.2万トン)で、前年同期(28.2万トン)を上回った。
- ・銚子港での1～6月の水揚量は前年を上回り、道東まき網の6月の水揚量は前年・前々年を下回った。これらの主な原因として、前年・前々年の黒潮続流の異常な北偏の弱まりと本年の道東沖への親潮の南下による魚群の北上停滞が考えられる。
- ・日本海側では3～4月に隠岐海峡周辺での漁獲が好調で、境港の1～6月の水揚量は前年を上回った。
- ・価格は前年・前々年を下回り、前年11月から低下傾向が続いた。

## ● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・さば類の全国主要港における1～6月の水揚量は12.1万トン(太平洋側1.4万トン、東シナ海・日本海側10.7万トン)で、前年同期(12.2万トン)並みであった。
- ・東シナ海・日本海側では対馬海域を中心に前年11月からの好漁が続いた一方、太平洋側では不漁であった。三陸南部の底曳網の水揚量は比較的好調だった前年・前々年を大きく下回ったが、この原因として、黒潮続流の北偏解消と親潮の南下が考えられる。

## ● マアジ

- ・マアジの全国主要港における1～6月の水揚量は3.1万トン(太平洋側0.3万トン、日本海側2.8万トン)で、前年同期(3.5万トン)を下回った。
- ・日本海側では、1～2月に隠岐海峡周辺で好漁であったが、境港における1～6月の水揚量は前年を下回った。
- ・東シナ海側では、5月に対馬海域で好漁であったが、1～6月の東シナ海側の水揚量は前年を下回った。

## ● カツオ

- ・竿釣りによる生鮮カツオの1～6月の水揚量は6,943トンで、過去10年で最低水準だった。
- ・本年は盛漁期の主群となる小型カツオの近海への来遊量は漁期はじめから少なく、北上ルートの水温が20℃以上に上昇しても、小型カツオはほとんど見られなかった。
- ・4月まで水揚の主体となった3～4kg台のカツオは脂乗りが良く、近海で越冬したカツオと考えられた。
- ・2020年漁期と状況が類似しており、現在の小型カツオの出現状況から考えても今後の小型カツオの東北沖への来遊は期待が薄い。
- ・釣りによる生鮮カツオの全国月平均価格は、年初から2021年以降で最も高値で推移した。
- ・まき網による生鮮カツオの水揚量は529トンで、過去4年平均の9%で低調、価格は近年を上回る高値で推移した。

## ● ビンナガ

- ・1～6月の全国の生鮮ビンナガの水揚量は1.8万トンで、過去4年平均の1.2倍だった。
- ・漁場は例年同様に房総南西沖～東北南部沖だった。
- ・ビンナガ主体漁場の平均漁獲量は14.1トン/隻・日で、前年同期(8.3トン/隻・日)より好漁だった。
- ・価格は385～636円/kgで、年初から高値で推移したが、徐々に下がった。

## ● スルメイカ

- ・全国主要港における1～6月の生鮮スルメイカの水揚量は2.3千トンで、前年同期(1.4千トン)を上回ったが、2021～2024年平均(4.0千トン)を下回った。
- ・日本海の小型いか釣り船による1～6月の金沢港での水揚量は0.5千トンで、前年同期を上回ったが、2021～2024年平均を下回った。一方、太平洋側で三陸・常磐の主要港の1～6月の水揚量は1.0千トンで、前年を上回り、2021年以降最多であった。特に6月の底曳網による漁獲が好調であった。
- ・全国主要港における1～6月の冷凍スルメイカの水揚量は189トンで、前年(311トン)および2021～2024年平均(669トン)を下回った。

● **アカイカ**

- ・5月中旬から北太平洋西経海域主体に大型いか釣り船1隻、中型いか釣り船26隻、サンマ棒受網兼業船(試験操業船)がアカイカ操業を開始した。
- ・試験操業船を除いて7月現在も操業中である。

# 1. わが国周辺の海況

## (1) 海域別海況概要

2025 年上半期は黒潮続流の北偏と黒潮大蛇行が解消したため、三陸～道東では海面水温が近年より低めの海域がみられた。日本海の海面水温は、山陰を中心に低めの傾向が続いたが、気温が 6 月としては最も高い影響で、急激に昇温した。

### 1) 黒潮域・東シナ海

2017 年 8 月に始まり 7 年 9 カ月続いた黒潮大蛇行(A 型流路)は 4 月下旬に解消し、7 月現在もこの状態が続いている(図 1)。

冬季(1～3 月)の黒潮流路は、四国沖では安定していたが、蛇行部は変動が大きかった(図 2-1)。冬季前半は南下が著しく 29° N 以南に達した。冬季後半は、黒潮流軸の蛇行最南下部からの冷水渦の切離が繰り返された。

春季(4～6 月)の黒潮流路は変動が大きかった(図 2-2)。4 月下旬に潮岬沖で黒潮流軸から蛇行部全体が切離されて巨大な冷水渦を生じ、直進流路となったが、非大蛇行接岸(N 型)流路とは異なり、四国～潮岬沖では離岸が続いた。5 月に四国沖で発生した小蛇行は発達しながら東進し、6 月には四国～潮岬で黒潮流軸が接岸し、遠州灘沖で蛇行して伊豆諸島西を北上する B 型流路になった(図 1-3)。

6 月(図 1-3)に入ると気温が高かった影響も加わり、海面水温の上昇が進み、近年差が拡大した(図 3)。

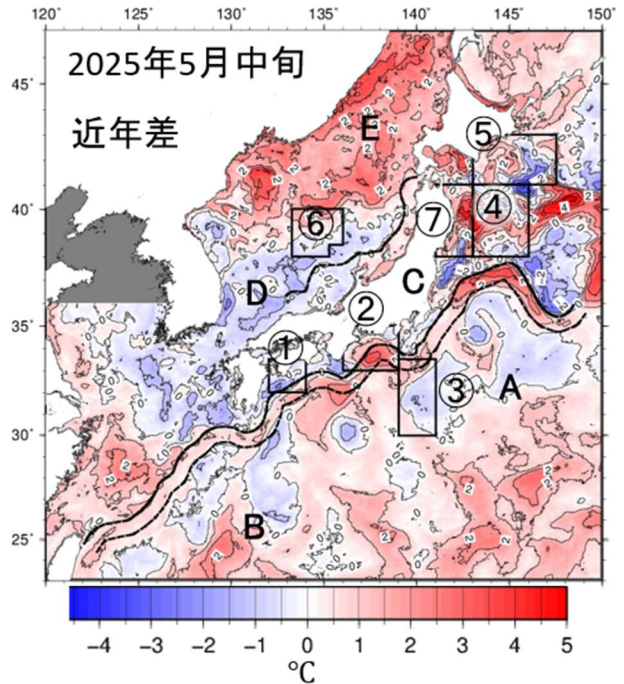


図 1-2. 2025 年 5 月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

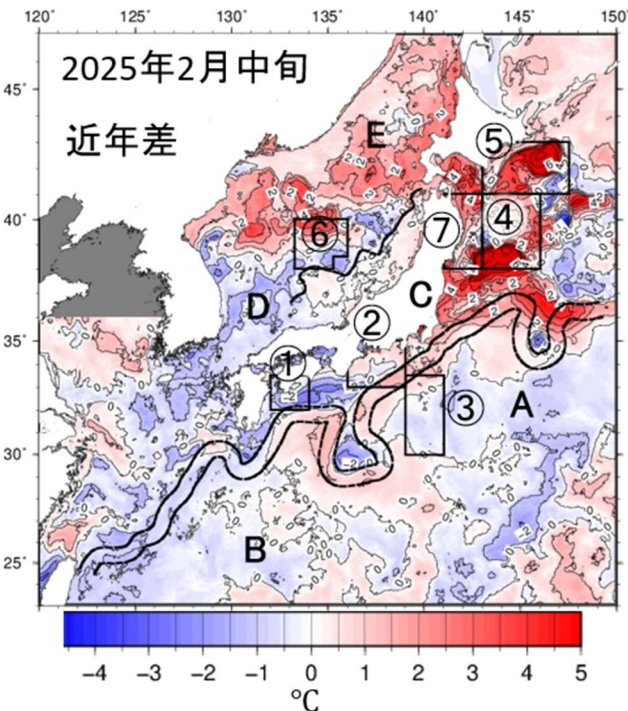


図 1-1. 2025 年 2 月中旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路 黒枠①～⑦は図 3 の海面水温の近年差を計算した範囲

四国海域(図 1-①)の海面水温は、冬季は黒潮流軸が離岸した影響により、近年より低めの時期が多かった。春季も黒潮流軸の離岸の影響で近年より低めであったが、5 月以降は蛇行部が切離された後、黒潮流軸が接岸した影響で、近年より高めになった。

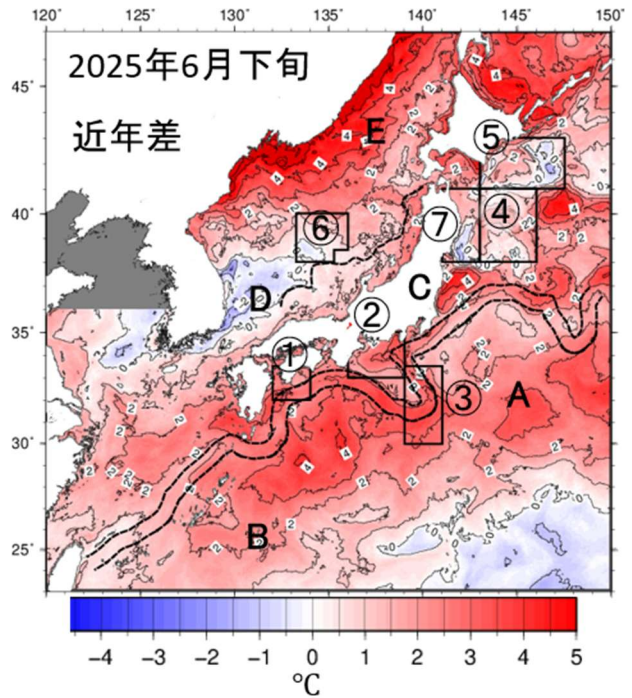


図 1-3. 2025 年 6 月下旬の海面水温の近年差および黒潮と対馬暖流の流路

遠州灘～熊野灘(東海)海域(図 1-②)の海面水温は、冬季は遠州灘沖の黒潮の屈曲部から暖水が波及したため、おおむね近年より 1～2°C 高めであった(図 3)。春季も黒潮からの暖水波及や黒潮流路の接岸により、海面水温はおおむね近年より高めであった。気温が 6 月としては最も高かった事も加わり、6 月以降は一気に昇温が進んだ

伊豆諸島南部(図 1-③)の海面水温は、冬季は風が強かった影響で近年よりやや低めであった。春季前半は、おおむね近年並であったが、6 月以降は気温が高かった影響もあり昇温が進んだ。沖縄東沖～本州南方沖(図 1-B)や関東南東沖(図 1-A)の海面水温も、伊豆諸島南部同様に冬季～春季前半は風が強くて、近年より低めの海域が多かったが、5 月以降は近年より高めの海域が拡大した。

東シナ海の海面水温は、冬季は風が強かった影響で、おおむね近年より低めであった。春季も北部を中心に風が強かった影響で近年より低めであったが、6 月は黒潮流軸周辺を中心に近年より高めであった。

## 2) 親潮域・混合水域

冬季の黒潮続流は、岸側の最北上部(峰)が前年 12 月に切離されて暖水渦を形成したが、その後も再結合せず、約 2 年間にわたった黒潮続流の北偏は解消した(図 2-1)。また、親潮も春季前半には平年並みまで回復し、三陸～道東の高水温も解消した。

親潮の面積(100m深で 5°C以下)は冬季～春季前半は拡大が続き、4 月には平年(1993～2017 年の平均)並まで回復した。親潮第一分枝の南端も、黒潮続流の北偏が解消した影響もあって、冬季後半～春季前半には三陸南部～常磐北部付近に達した。しかし、6 月には親潮の面積は縮小して平年よりかなり小さめになった。

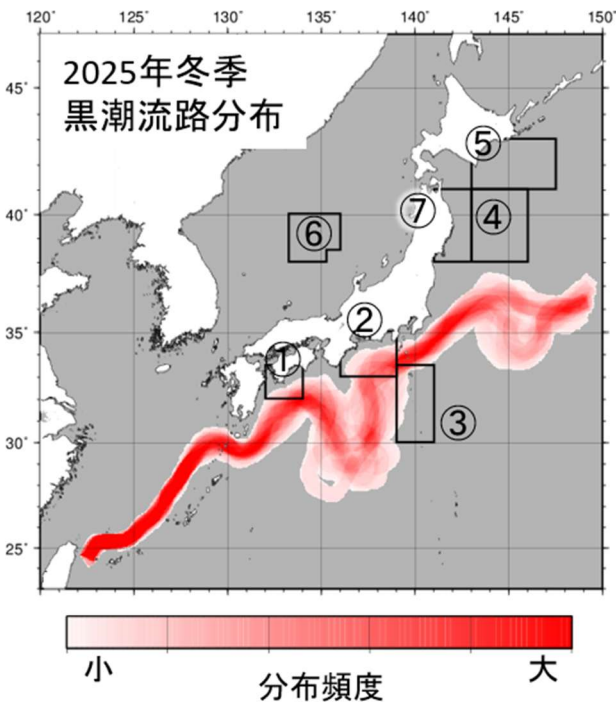


図 2-1. 2025 年冬季(1～3 月)の黒潮流路分布(海上保安庁海洋情報部の海流 GIS データを使用)

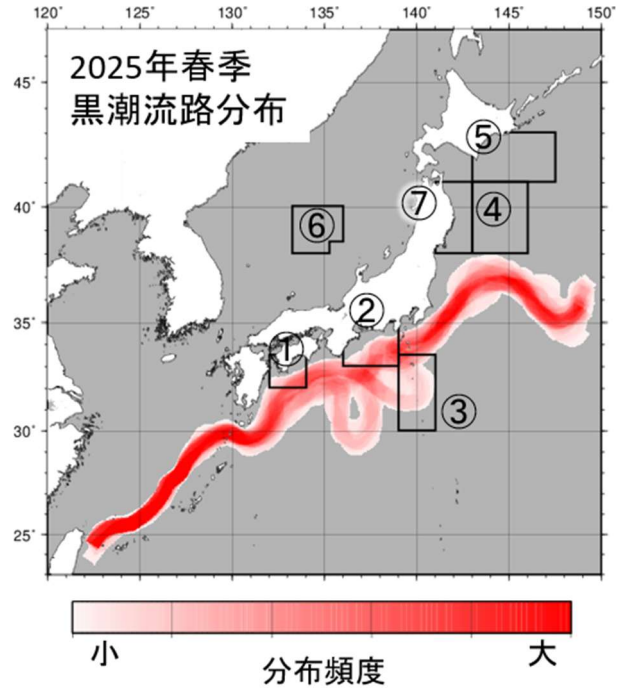


図 2-2. 2025 年春季(4～6 月)の黒潮流路分布

三陸沿岸海域(図 1-⑦)と三陸沖海域(図 1-④)の海面水温は、冬季前半は黒潮続流から切離された暖水渦の影響で、近年より 3～5°C 高めであった(図 3)。冬季後半の海面水温は、暖水渦の縮小と親潮面積の拡大の影響で近年並となり、春季前半には三陸沿岸では近年より低めの海域もみられた。6 月は親潮面積が縮小し気温も高かった影響で昇温が進み、近年差が急激に拡大した(図 3)。

道東海域(図 1-⑤)の海面水温は、2024 年 5 月に黒潮続流から切離・北上した暖水渦の影響で、冬季は近年より 2～3°C 高めであったが(図 3)、春季は親潮面積の拡大にともない近年並となった。6 月には三陸海域同様に近年平均より急激に上昇した(図 3)。

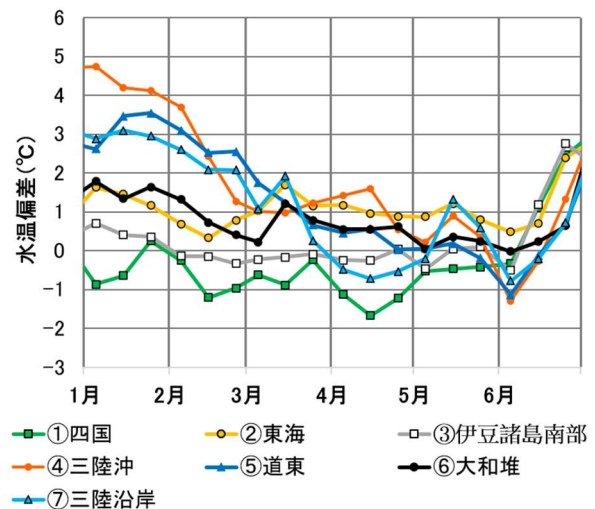


図 3. 1～6 月における海域毎の海面水温の近年差の推移

### 3) 日本海

対馬暖流の勢力は、冬季前半は平年より強め～かなり強めであったが徐々に縮小し、冬季後半～春季前半は平年より弱めの期間が多かった。春季後半には平年より強めに回復した。対馬暖流の流路は、冬季～春季前半は大和堆南沖を通過し、能登半島沖で蛇行して離岸し、東北でやや接岸した(図 1-1、図 1-2)。春季後半は全般的に接岸が進んだ。

日本海の海面水温は、期間を通して北部(図 1-E)では近年より高めであったが、南部(図 1-D)では冬季は風が強く、対馬暖流の接岸による冷水南下の影響もあって、近年より低めであった。

大和堆海域(図 1-⑥)の海面水温は、冬季は対馬暖流の勢力縮小とともに近年差が縮小したが、3月には北部で近年より高めの海域が拡大し、近年差は拡大した。春季前半は対馬暖流の勢力が縮小した影響で徐々に近年差が縮小した。6月に入ると他海域と同様に、気温の記録的高温の影響で海面水温が近年より低めの海域が縮小し、大和堆海域でも近年差が拡大した(図 3)。

### (2) 黒潮大蛇行の推移

2017年8月に始まった黒潮大蛇行は2025年も続き、2月上旬に黒潮大蛇行の南端が今回の黒潮大蛇行では最南となる $28^{\circ} 20' N$ 付近まで南下した(図 5)。その後は流路の変動が激しくなり、2月下旬に黒潮流軸の蛇行南下部の先端が切離されて冷水渦を形成し、3月上旬にほぼ同じ海域で再結合した。3月下旬に蛇行南下部の先端が再び切離されて冷水渦を形成した。4月に入ると蛇行部は逆 $\Omega$ 型となり(図 4-A)、4月下旬には蛇行部全体が切離されて巨大な冷水渦を形成した(図 4-B)。この冷水渦は徐々に西進し、7月には九州東沖に達して黒潮流軸に接近し(図 4-D)、その後黒潮流軸と結合して九州東沖で大きく蛇行した(図 4-E)。

5月に四国沖で黒潮流軸に小蛇行が発生し、発達しながら東進して6月には遠州灘沖に達した(図 4-C)。この小蛇行はさらに発達を続け、7月にB型流路(図 4-D)となり、7月上旬には八丈島の南を通過し、八丈島～三宅島の東を北上するC型流路(図 4-E)になった。

黒潮流軸の蛇行南下部の先端から切離された冷水渦と黒潮流軸が再結合する現象は、2017年8月に今回の黒潮大蛇行が始まってから3回発生している。2020年10月に切離されて2021年2月に再結合した事例と、2022年2月に切離されて2022年5月に再結合した事例では、冷水渦の切離から約3～4カ月で再結合し、冷水渦の東進による黒潮流軸の四国～潮岬での離岸は約4カ月続いた。一方、2024年5月に切離されて2024年7月の再結合した事例では、冷水渦の切離から約2カ月で再結合し、冷水渦が黒潮流軸との結合したことによって生じた蛇行の東進による離岸は約2カ月続いた。本年4月下旬

の冷水渦の切離も約2カ月で黒潮流軸と再結合し、九州東沖で黒潮流軸が蛇行し、四国沖で発生した小蛇行が約1カ月で遠州灘沖まで東進した。

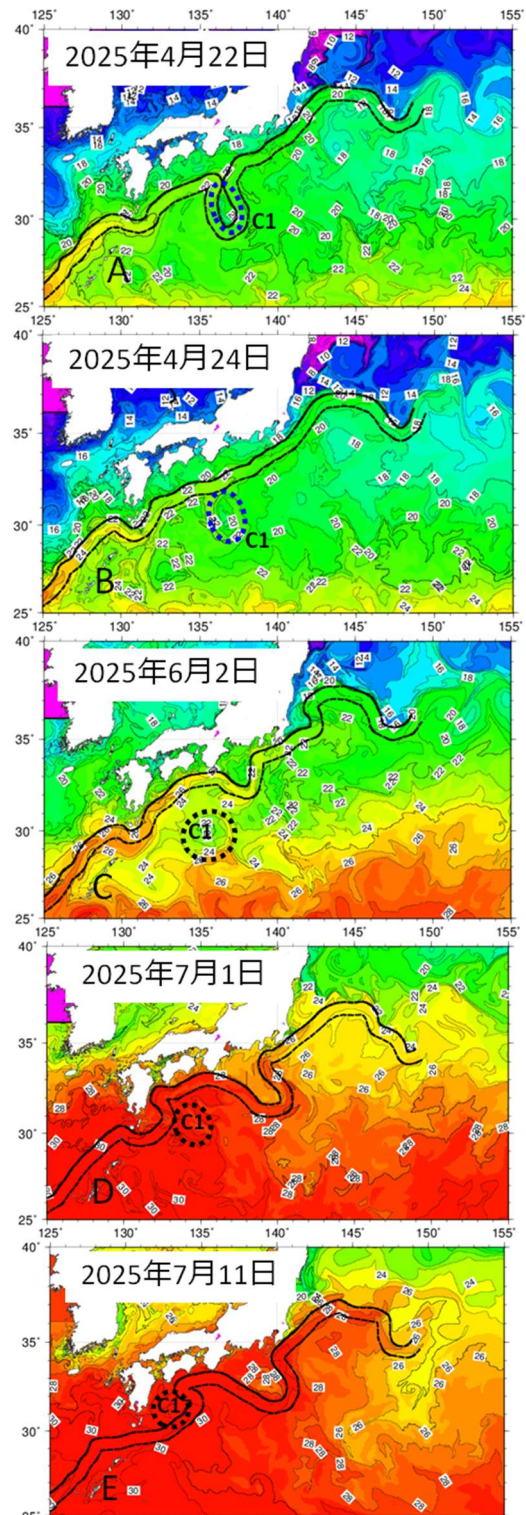


図 4. 2025年4～7月の海面水温分布、黒潮流路および冷水渦(C1) A:2025年4月22日、B:2025年4月24日、C:2025年6月2日、D:2025年7月1日、E:2025年7月11日

このように、今回は2024年の事例と類似しているため、冷水渦との結合により九州東沖で生じた蛇行

は約 2 カ月で潮岬～遠州灘沖まで東進すると考えられる。今後、潮岬～遠州灘沖で蛇行が発達して一時的に A 型流路の蛇行が発生する可能性があるが、東進速度が速いため、仮に A 型となっても長期間続かないと思われる。

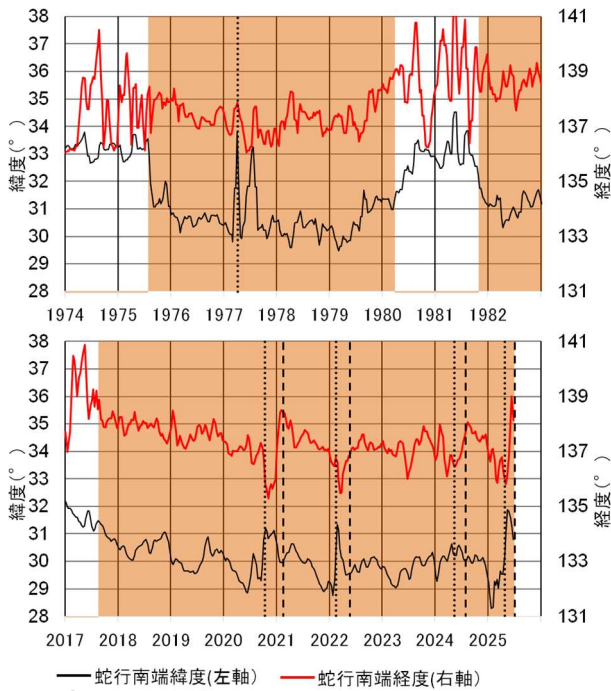


図 5. 黒潮蛇行部南端の緯度と経度の推移  
上段:1974～1982 年、下段:2017～2025 年

1975～1980 年の黒潮大蛇行では、大蛇行解消の約 1 年前から大蛇行部の南端が徐々に北上して東進し、C 型流路になった(図 5)。今年上半期には黒潮蛇行部が冷水渦として切離・再結合するとともに、C 型流路へ急速に移行した。これらの点は 1975～1980 年の大蛇行の解消時とは異なるが、いずれも、大蛇行の解消時には蛇行部が東進して C 型流路に移行していた。以上のことから、今回の黒潮大蛇行は収束に向かう可能性が高いが、過去の事例と異なる点もあることから、今後の黒潮流路の推移を注視したい。

(海洋事業部 矢野泰隆)

## 2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

JAFIC 調査港における 2025 年 1～5 月の調査対象全魚種の累計水揚量は 66 万 8 千トンで、前年同期(63 万 1 千トン)の 106%(図 6)、過去 5 年平均(72 万 9 千トン)の 92%であった。平均価格は 215 円/kg で、前年同期(226 円/kg)の 95%、過去 5 年平均(193 円/kg)の 111%であった。なお、本報告の水揚量と価格は JAFIC「おさかなひろば」による。

主要 48 魚種の 2025 年 1～5 月の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年同期と比較した(表 1、図

7)。水揚量は、カタクチイワシ、かれい類、クロマグロなど 19 魚種が前年同期を上回り、ニシンやビンナガなどの 4 魚種は前年同期並み(増減率 5%以下)、ウルメイワシ、生鮮カツオ、生鮮メバチなど 26 魚種は前年同期を下回った。平均価格は、マアジ、ギンザケ(養殖)、ハマチ(養殖)など 28 魚種が前年同期を上回り、冷凍カツオ、生鮮スルメイカ、冷凍メバチなど 8 魚種が前年同期並み、マイワシ、さば類、メカジキなど 11 魚種が前年同期を下回った。

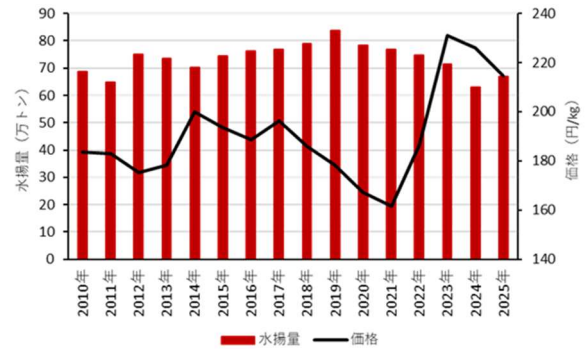


図 6. JAFIC 調査港の 1～5 月累計水揚量と平均価格の推移

表 1. JAFIC 調査港の 2025 年 1～5 月の魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較(2024 年 1～12 月の平均価格の昇順に並べ、1,000 円/kg 以上の魚種を赤字で示した。)

	1～5月							
	2025年		2024年		前年比		1～12月	
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格	2024年	価格
スケトウダラ	48,479.2	65	39,221.8	57	124%	115%	55	
マイワシ	263,106.8	54	225,426.7	86	117%	63%	70	
カタクチイワシ	2,640.6	43	1,272.8	90	207%	48%	79	
ウルメイワシ	5,947.1	68	11,651.3	80	51%	85%	86	
ニシン	3,207.0	81	3,377.6	111	95%	73%	94	
さば類	102,840.8	118	91,849.0	131	112%	91%	137	
ホッケ	2,947.6	186	6,713.8	117	44%	159%	157	
はたてがい殻付	13,125.9	325	9,769.5	166	134%	195%	196	
マアジ	23,584.9	267	27,118.0	244	87%	110%	251	
マダラ	19,129.8	223	18,046.1	192	106%	116%	252	
冷カツオ	57,285.6	271	67,082.4	270	85%	100%	254	
かれい類	6,074.1	265	4,734.0	316	128%	84%	294	
ブリ	8,858.8	386	12,959.4	328	68%	118%	312	
生カツオ	6,320.6	581	8,751.7	431	72%	135%	334	
冷キハダ	11,292.3	440	12,797.7	432	88%	102%	419	
ビンナガ	7,981.1	484	8,030.1	372	99%	130%	439	
サンマ	0.5	378	0.6	261	75%	145%	462	
マカジキ	238.2	831	270.8	780	88%	107%	680	
マダイ(天然)	1,384.4	797	1,873.8	670	74%	119%	680	
さわら類	843.1	812	1,176.8	730	72%	111%	703	
ヒラマサ	325.3	895	346.4	787	94%	114%	712	
ギンザケ(養殖)	1,520.9	982	2,448.8	822	62%	119%	814	
生スルメイカ	978.9	869	786.7	842	124%	103%	818	
ヤリイカ	813.2	1,131	1,626.2	808	50%	140%	826	
冷メバチ	9,040.2	861	7,747.5	851	117%	101%	851	
生キハダ	4,040.0	858	3,508.3	968	115%	89%	942	
ヒラメ(天然)	832.4	1,034	907.0	952	92%	108%	944	
たこ類	1,978.5	785	1,665.3	1,048	119%	75%	994	
あなご類	201.6	1,003	322.9	1,050	62%	96%	1,051	
サザエ	56.4	1,258	90.8	1,151	62%	109%	1,069	
メジマダコ(ヨコフ)	198.9	1,219	171.3	1,125	116%	108%	1,076	
ハマチ(養殖)	628.0	1,402	337.4	1,001	186%	140%	1,086	
生メバチ	854.6	1,427	1,366.0	825	63%	173%	1,086	
マダイ(養殖)	72.4	1,133	68.5	1,115	106%	102%	1,127	
メカジキ	844.3	1,365	675.6	1,536	125%	89%	1,218	

表 1. (続き)

	1～5月						1～12月
	2025年		2024年		前年比		2024年
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格	価格
冷ミナミマグロ	2,483.7	1,953	1,519.2	1,810	163%	108%	1,654
冷スルメイカ	168.2	2,020	300.8	1,942	56%	104%	1,703
キンメダイ	699.0	1,867	872.5	1,723	80%	108%	1,936
ヒラメ(養殖)	4.3	2,328	8.0	1,994	54%	117%	2,096
クロマグロ	1,964.2	3,000	1,614.2	3,153	122%	95%	2,673
キンキ(キチジ)	542.4	2,156	406.7	2,263	133%	95%	2,730
アカムツ(ノドグロ)	119.3	2,377	101.0	2,119	118%	112%	2,771
あまだい類	69.2	3,649	78.1	3,182	89%	115%	3,216
トラフグ	98.5	4,325	103.9	4,416	95%	98%	4,134
クルマエビ	3.8	5,336	6.9	4,905	55%	109%	4,571
イセエビ	35.2	6,708	49.2	5,955	72%	113%	5,492
あわび類	8.0	9,219	11.9	9,818	67%	94%	9,455
うに類(剥き身)	30.5	9,175	40.5	7,834	75%	117%	12,990

このように、2025年1～5月は、主要魚種について価格と水揚量の関係を前年同期と比較すると、水揚量が減少し、価格が上昇した魚種が多く見られた。一方、全体としては、前年同期と比較すると、水揚量は前年同期をやや上回り、平均価格は前年同期並みであった。また、過去5年平均と比較すると、水揚量は過去5年平均を下回り、価格は上回った。魚価の高止まり傾向は継続しており、円安による輸入水産物価格の上昇や燃油をはじめとする資材価格の高騰などの影響が示唆されるものの、価格の上昇は落ち着きつつある。

(水産情報部 石山なな子)

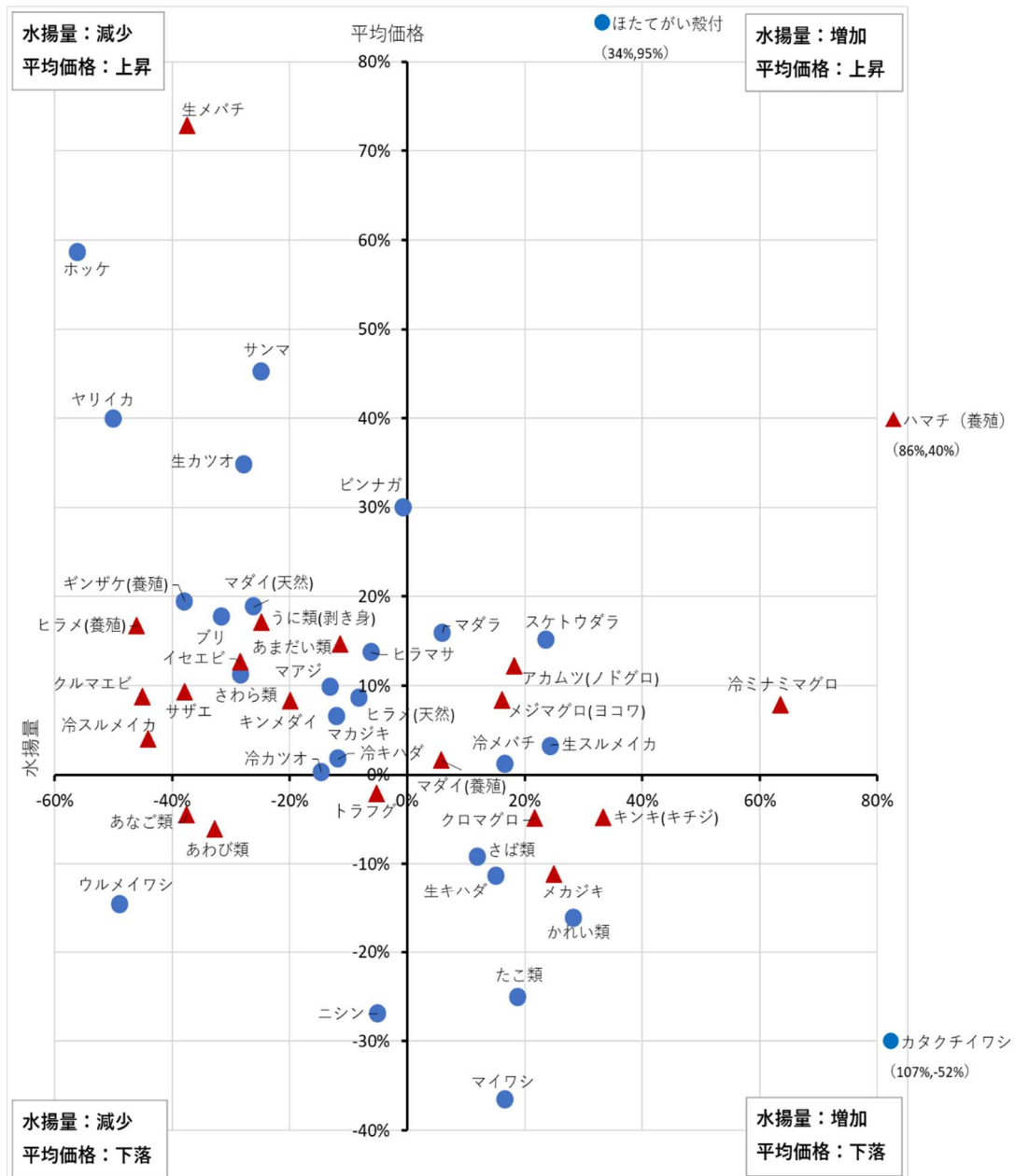


図 7. 主要 48 魚種の水揚量と平均価格の比較(2025 年 1～5 月/2024 年 1～5 月)。横軸と縦軸の目盛に記載した%は、前年同期比の増減率を示す。▲は 2024 年 1～12 月の平均価格が 1,000 円/kg 以上、●はそれ未満の魚種を示す。目盛の範囲外にある魚種については、水揚量と価格の増減率をカッコ内に示す。

### 3. 魚種別の漁海況・市況

#### (1) マイワシ・さば類・マアジ

##### ● マイワシ

マイワシの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 31.2 万トン(太平洋側 24.0 万トン、日本海側 7.2 万トン)で、前年同期(28.2 万トン)を約 3 万トン上回った(図 8)。

銚子港での 1~6 月の水揚量は前年を約 4.7 万トン上回った。その主な原因として、親潮の南下と前年・前々年の黒潮続流の異常な北偏解消により、常磐~三陸沖の水温が低下し、魚群の北上が停滞したことが挙げられる。一艘まき網の水揚げ物は体長 15~16cm(1~3 歳魚)が主体、定置網では 16~18cm(2 歳魚以上)が主体であった。5 月からは 11~14cm の 0 歳魚が獲られ始めた。6 月には道東沖の棒受網とまき網漁業が開始され、中旬の棒受網では体長 17~18cm(2~4 歳魚)主体に漁獲され、体長 20cm 以上(4 歳魚以上)も混じた。

日本海側では 3~4 月に隠岐海峡周辺での漁獲が好調で、前年水揚げのなかった境港での 1~6 月の水揚量は 0.9 万トンであった。隠岐海峡の水揚げ物は体長 15~17cm(1 歳魚以上)が主体であった。

価格は全体的に前年・前々年を下回り、前年 12 月からの低下傾向が継続した(図 9)。その要因として、ペルーのカタクチイワシ魚が好調なことから、世界の魚粉価格が低下したことが考えられる。

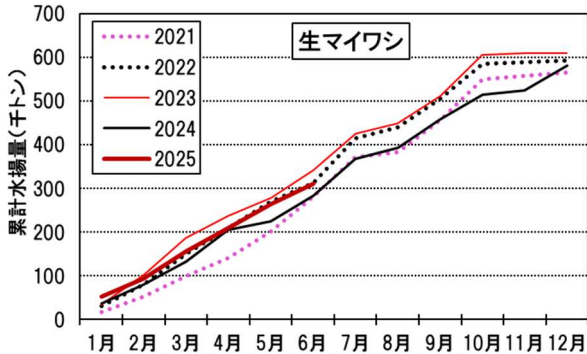


図 8. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

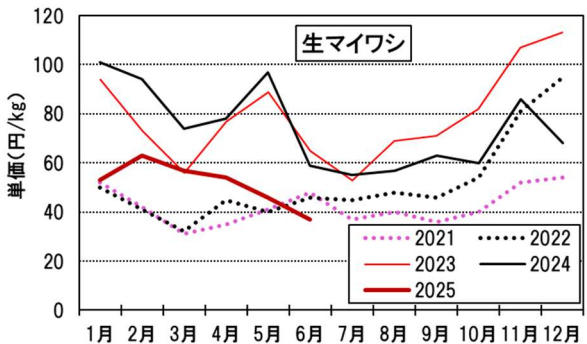


図 9. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

##### ● さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 12.1 万トン(太平洋側 1.4 万トン、東シナ海・日本海側 10.7 万トン)で、前年同期(12.2 万トン)並みであった(図 10)。

太平洋側では、2022 年からの不漁が続いており、1~6 月にはまき網による水揚げがほとんどなく、銚子港では 2023 年以降まとまった水揚げがない状態が続いている。5~6 月の北上期には前年・前々年ともに石巻港の底曳網でまとまって水揚げされたが、本年は低調であった。この要因として、前年・前々年は黒潮続流が異常に北上・接岸したが、本年は黒潮続流が南下したことにより、さば類の分布水深が前年・前々年と大きく異なった可能性が考えられる。

東シナ海・日本海側では、1~2 月に主に対馬周辺で漁獲され、前年 11 月からの好漁が続いた。5~6 月には隠岐海峡周辺でもまとまった漁獲があった。1~6 月の境港の水揚量は前年をやや下回った。対馬周辺の水揚げ物は 1 月には 30~33cm(2 歳魚以上)主体であったが、2 月には 2 歳魚以上が減少し、3 月以降は 20~25cm(1 歳魚)主体となった。隠岐海峡での 5~6 月の水揚げ物は 25~26cm(1 歳魚)主体であった。

価格は近年では高水準であった前年・前々年を下回る水準で推移した(図 11)。

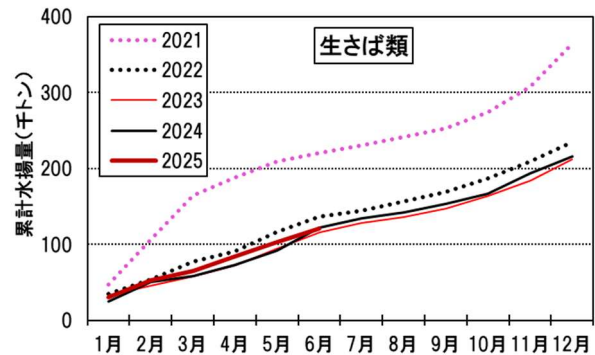


図 10. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

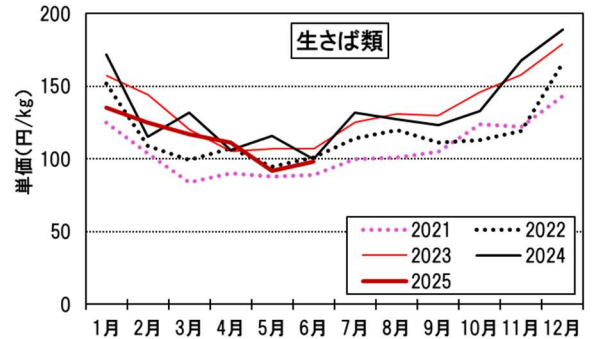


図 11. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

## ● マアジ

マアジの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 3.1 万トン(太平洋側 0.3 万トン、日本海側 2.8 万トン)で、前年同期(3.5 万トン)を下回った(図 12)。日本海側では、1~2 月に隠岐海峡周辺で漁獲が続いたが、境港における 1~6 月の水揚量は前年の 3 割程度であった。東シナ海側では、5 月に対馬海域で前年同月の 6 倍程度のまとまった漁獲があったものの、1~6 月の東シナ海側の水揚量は前年を下回った。価格は 3~5 月は前年を上回り、他の月は下回った(図 13)。

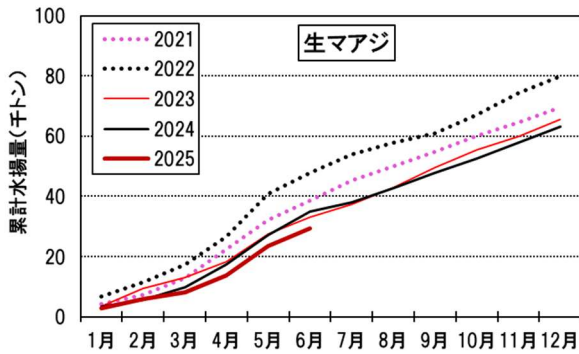


図 12. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

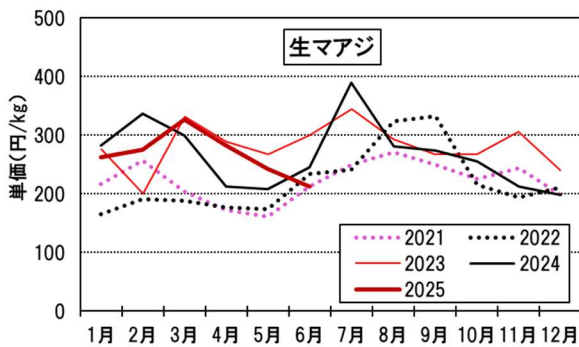


図 13. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

(水産情報部 源 浩輔)

## (2)カツオ・ビンナガ

### ● カツオ

1~6 月の全国の釣りによる生鮮カツオの水揚量は 6,943 トンで、過去 4 年平均(約 1.3 万トン)の 53% で(図 14)、2015 年以降最低水準だった。中型竿釣り船の漁期は例年どおり 2 月上旬ごろからスタートしたが、硫黄島周辺の漁場では 3~6kg が主体で、本年の漁獲の主体となる小型(2kg 以下)の漁獲量は少なかった(図 16)。その後は近年の春先の主漁場となる南西諸島が漁場となり、4 月は東海地方沖が活況となったが、ここでも小型カツオは少なく、3~4kg 台が主体だった。3~4kg 台のカツオは脂が乗っているという情報もあったことから、前年に来遊したカツ

オが冬季に亜熱帯域まで南下せず、日本近海で越冬した群とみられる。5 月になってもビンナガ主体漁場に混じるカツオは全体的に少なく、6 月も小型カツオは少なかった。以上から、本年は盛漁期に主群となる小型カツオの近海への来遊量は漁期はじめから少ないと考えられる。また、伊豆小笠原沿いのカツオ北上ルートの水温が 20℃以上に上昇し、小型カツオの来遊量が徐々に増加することを期待したが、7 月中旬時点で小型カツオはほとんど見られない。2020 年は漁期を通して小型カツオが少なく、本年も同様であれば今後の東北沖への来遊は期待が薄い。小型カツオの出現状況を今後も注視したい。

価格は年初から 2021 年以降で最も高値で推移した(図 15)。全国的に水揚量が少なかったことや、漁場が近かったために鮮度が良く、値崩れする要因がなかったとみられる。

まき網による生鮮カツオの水揚量は 529 トンで、過去 4 年平均(約 5,300 トン)の 9% で低調だった(図 17)。本年のまき網の漁獲対象はキハダやビンナガが主体で、カツオは釣りと同様にまとまらなかった。

価格は、かつお・まぐろまき網が本格化する 4 月からは 400 円/kg 以上で、近年を上回る高値で推移し、5~6 月は 2021 年以降で最も高値だった(図 18)。

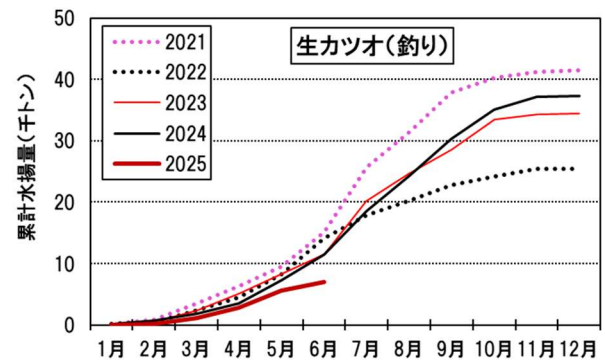


図 14. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣りの)月別累計水揚量の推移

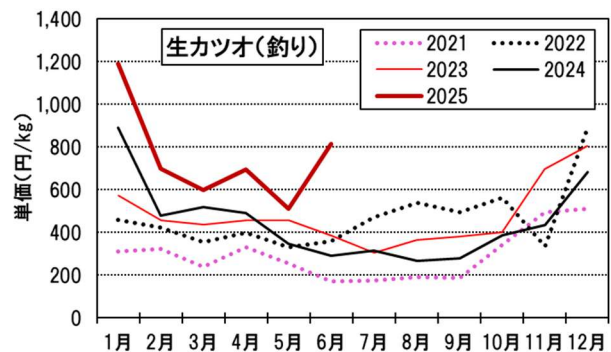


図 15. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣りの)月別単価の推移

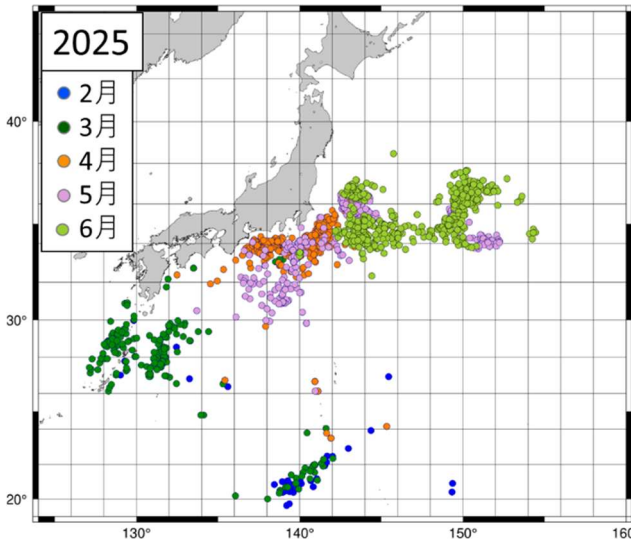


図 16. 2025 年 2～6 月の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体) ※1 月の漁場情報は無し

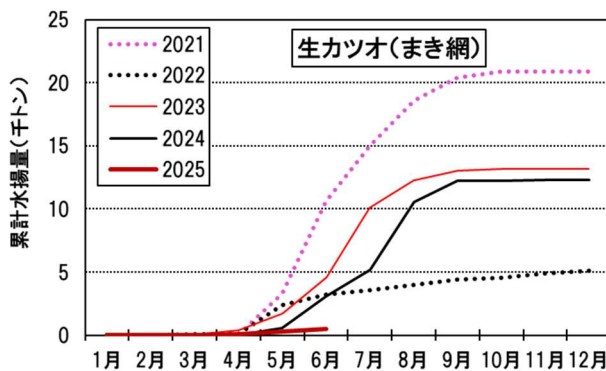


図 17. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

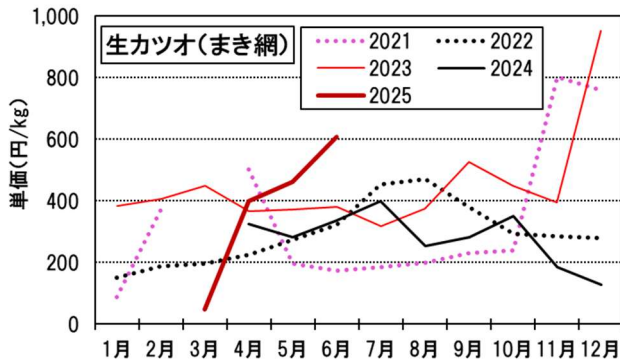


図 18. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

### ● ビンナガ

1～6 月の全国の生鮮ビンナガの水揚量は 1.8 万トンで、過去 4 年平均(1.4 万トン)の 1.2 倍だった(図 19)。生鮮ビンナガの水揚の主体となる中型竿釣り船による漁獲は、5 月中旬から始まり、漁場は例年と同様に、房総南西沖～東北南部沖の黒潮続流上やその南側だった。ビンナガ主体漁場の平均漁獲量は 14.1 トン/隻・日で、前年(8.3 トン/隻・日)より好漁だ

った。

全国平均価格は 385～636 円/kg で、年初から高値で推移したが、徐々に下がった(図 20)。

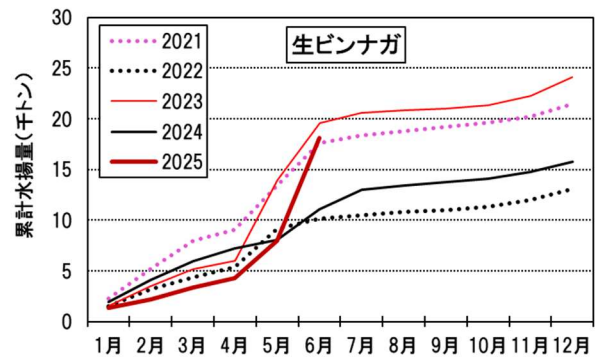


図 19. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

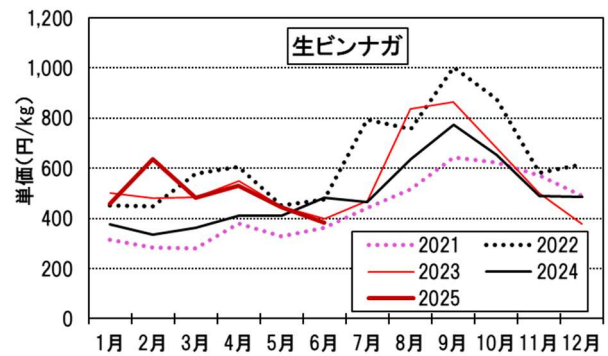


図 20. 2021～2025 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

(水産情報部 水野紫津静葉)

### (3)スルメイカ・アカイカ

#### ● スルメイカ

生鮮スルメイカの全国主要港における 1～6 月の累計水揚量は 2.3 千トンで、前年同期(1.4 千トン)の 184%、2021～2024 年平均(4.0 千トン)の 62%であった(図 21)。過去最低であった前年および前々年(2 千トン)を上回り、2 年ぶりに増加に転じた。

1～6 月の生鮮スルメイカの価格は、1～2 月は前年並み、3 月は引き続き高かったが、4 月以降低下した(図 22)。価格低下の要因として、日本海の小型いか釣りや三陸の底曳網の漁獲物が小型であったためとみられる。

日本海に分布するスルメイカの主群である秋季発生系群は、九州西岸～山陰沖で秋季に産卵し、例年 5～6 月に日本海を北上しながら成長し、山陰～北陸で小型いか釣り船の漁獲対象となる。本年 1～6 月の海面水温は、日本海の能登半島西を除く全域で平年より低めに推移したことから、能登半島西沖で北上が停滞し、6 月になっても、佐渡や函館ではほとんど水揚げされなかった。この時期に小型いか釣りの水揚げの主体となる金沢港の本年 1～6 月の水

揚量は 554 トンで、前年同期(157 トン)の 3.5 倍に増加した。しかし、2021~2024 年平均(847 トン)の 65% に留まった(図 23)。

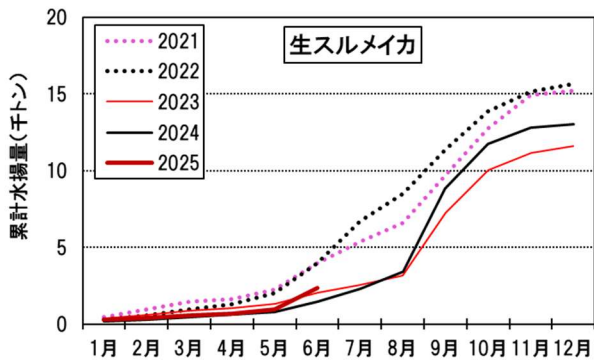


図 21. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

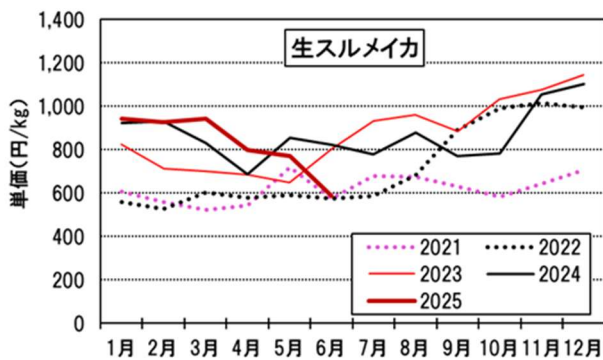


図 22. 2021~2025 年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

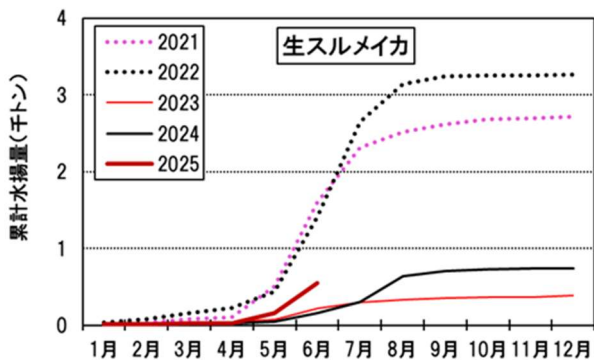


図 23. 2021~2025 年の金沢港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

太平洋側に分布するスルメイカは冬季発生系群が主体である。本年 1~6 月の三陸・常磐海域(銚子港以北)の主要港における水揚量は 1.0 千トン(前年比 178%)、2021~2024 年平均の 405 トンの 243%で、2021 年以降で最多であった(図 24)。3~5 月は三陸沿岸に親潮系冷水が南下したが、6 月になると黒潮続流から暖水が三陸沿岸に波及して一気に昇温した。このため、小型イカが来遊して漁況が好転したと考えられる。主要港別の 1~6 月の水揚量は、底曳網主体の石巻港は 748 トン(前年比 208%)、八戸港

は 137 トン(前年比 194%)と好調であった。一方、下北半島の小型いか釣り船による昼いか漁は 6 月下旬に始まり、今期の水揚量は 9 トン(前年比 75%)で、2021~2024 年平均(28 トン)の 32%であった。なお、道東の水揚げは、今期はまだない。

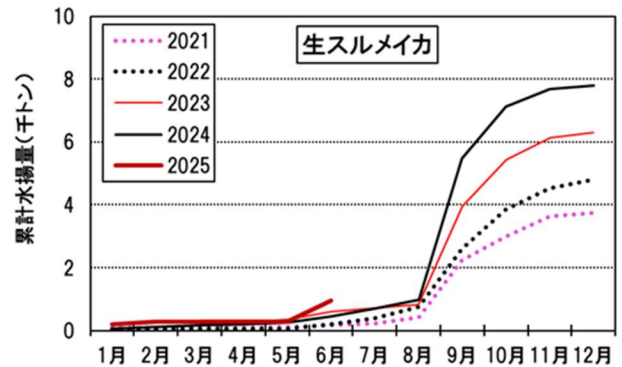


図 24. 2021~2025 年の石巻港・宮古港・八戸港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

中型いか釣り船(冷凍)の日本海のスルメイカ漁期は 5 月~翌年の 2 月末で、3~4 月が禁漁期間である。中型いか釣り船は、1~2 月は小型いか釣り船と同様に対馬東沖を操業し、6 月中旬に 2 隻が能登半島沖で操業を開始した。なお、船凍設備のある小型いか釣り船 3 隻は周年にわたり月に 1~2 回の頻度で水揚げした。

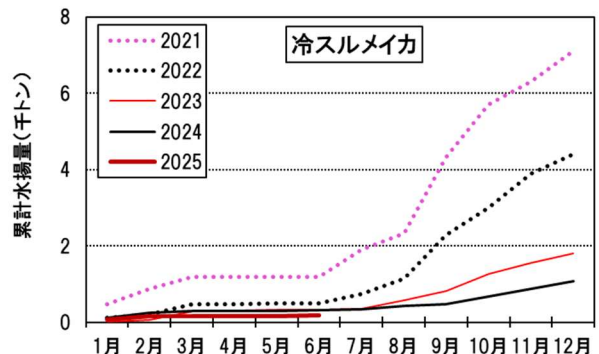


図 25. 2021~2025 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

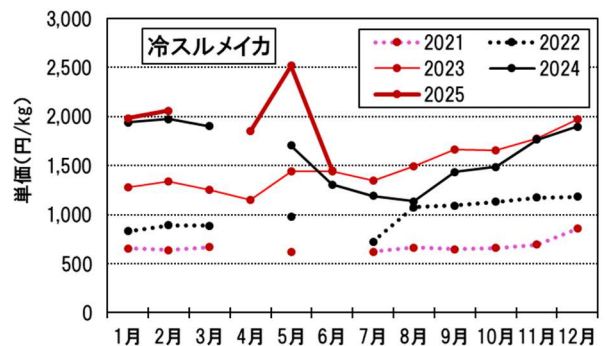


図 26. 2021~2025 年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移

1～6月の冷凍スルメイカの水揚量は189トンで、2021年以降最低で、前年(311トン)の61%、2021～2024年平均(669トン)の28%であった(図25)。冷凍スルメイカの単価は前年末から高水準で推移し、5月に過去最高の2,519円/kgを記録し、6月には低下した(図26)。なお、5月の水揚げは、小型いか釣り(船凍)1隻が八戸港に2.5トン(318ケース)を水揚げしたもので、全量一本凍結物(IQF)で1尾380～230gの大型サイズであったため高値を付けた。

(水産情報部 緑川聡)

### ● アカイカ(ムラサキイカ)

5月中旬から、中型いか釣り船26隻、大型いか釣り船1隻、サンマ棒受網船を改修したいか釣り兼業の試験操業船1隻、計28隻が北太平洋西経海域主体にアカイカ操業(夏漁)を開始した。近年、日本海でのスルメイカ漁の不振を受け、アカイカ夏漁の隻数は微増した(図27)。なお、7月現在も試験操業船を除いて操業が継続している。

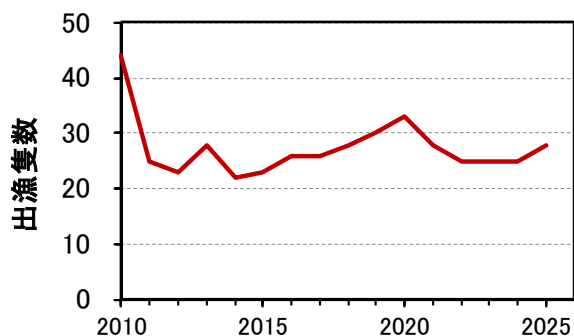


図27. アカイカ夏漁の出漁隻数(大型いか釣り船1隻、試験操業船1隻を含む)の推移

(水産情報部 酒井光夫)

## トピックス1 2025年6月の道東まき網の動向

マイワシ太平洋系群は資源が高水準になると分布域が北東に拡大し、ロシアの漁獲量が増加するとともに、道東海域に日本船のまき網漁場が形成される<sup>1</sup>(図28)。マイワシは、初夏に沖合から道東海域に來遊し、秋には北方四島海域周辺から主に沿岸を南下するが、その來遊は1970~80年代には7月に沖合で始まり(図29)、2019~2021年は6月下旬には道東に接岸した<sup>2</sup>。これは、道東周辺の海面水温が1970~80年代よりも高くなったためと考えられる。2023~2024年は三陸沖の春季海面水温が異常に上昇したが、本年は2022年並みとなった(図30)。そこで、近年の道東まき網の漁獲量と海面水温の関係についてまとめた。

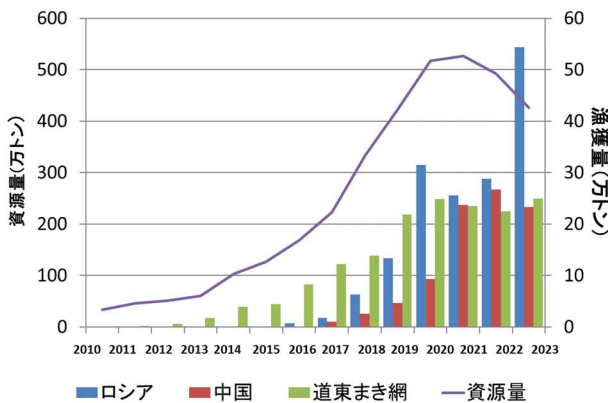


図28. 2010~2023年の道東海域におけるまき網によるマイワシ漁獲量と資源量の推移 データ出典: 令和6年度マイワシ太平洋系群の資源評価

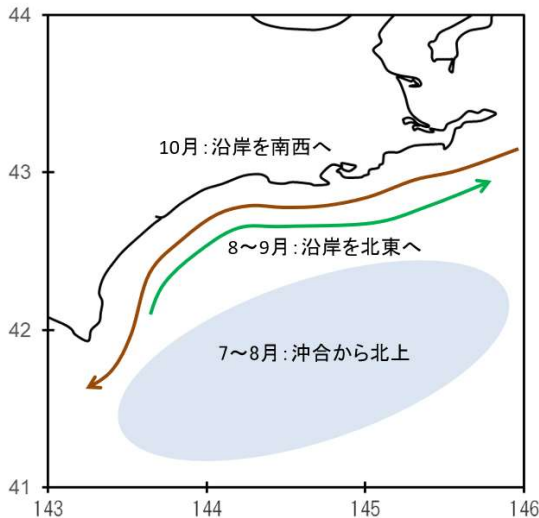


図29. 1970~80年代の道東海域周辺におけるマイワシの回遊経路 既存研究<sup>34</sup>を基に作成

1

[https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries\\_resources/meeting/stock\\_assesment\\_meeting/2024/files/sa2024-sc09/fra-sa2024\\_sc09-01.pdf](https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/meeting/stock_assesment_meeting/2024/files/sa2024-sc09/fra-sa2024_sc09-01.pdf)

<sup>2</sup> <https://www.jafic.or.jp/technicalreview/707/>

6月のまき網漁獲量は2023年と2024年が好漁、本年は2022年並みで、三陸沖の春季海面水温の変動と対応していた(図30)。なお、2023年と2024年は黒潮続流が異常に北偏したため、常磐~道東沖の水温が周年にわたり顕著に高かった。また、10月の漁獲量は2019年以降徐々に減少し、特に2024年では減少が顕著であった。この現象は上記の高水温に加え、道東沖の暖水塊が接岸したことにより、南下群の來遊が遅れたためと考えられる。

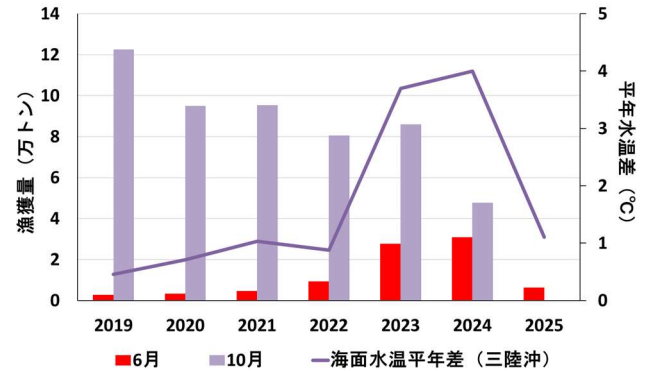


図30. 2019~2024年の6月と10月および2025年6月の道東海域まき網によるマイワシ漁獲量と三陸沖の春季海面水温年平均差の推移 データ出典: 釧路水産試験場および気象庁

6月下旬の漁場は2021年と2022年が散発的に形成されたのに対し、2023年と2024年は釧路~根室沿岸に形成された(図31)。また、2024年は6月中旬に釧路~広尾沖に形成された。2025年は6月中旬に襟裳岬沖に漁場が形成されたもののまとまらず、下旬なっても釧路~根室沿岸には來遊が見られなかった。

図31の期間における道東海域の6月中旬の平均海面水温を比較すると、2021年と2022年は道東沿岸北緯42度付近では12°C以下であったのに対し、2023年と2024年は12~14°Cで、2025年は2021年以降では最も冷水が差し込み、襟裳岬沖沿岸まで12°C以下の冷水に覆われていた(図32)。

本年6月の漁場は沖合域に形成され、船ごとの漁獲量にもばらつきがあったことから、魚群は薄く広がって來遊したと考えられるが、漁場位置は1970~80年代の7月に似ていた。このように、高水温化に伴う魚群北上の早期化により、道東まき網の漁場形成が早まったが、2023年と2024年は顕著であった(トピックス3参照)。

3

<https://agriknowledge.affrc.go.jp/RN/2010393279>

<sup>4</sup>[https://www.jstage.jst.go.jp/article/suisan1932/50/4/50\\_4\\_577/\\_pdf/-char/en](https://www.jstage.jst.go.jp/article/suisan1932/50/4/50_4_577/_pdf/-char/en)

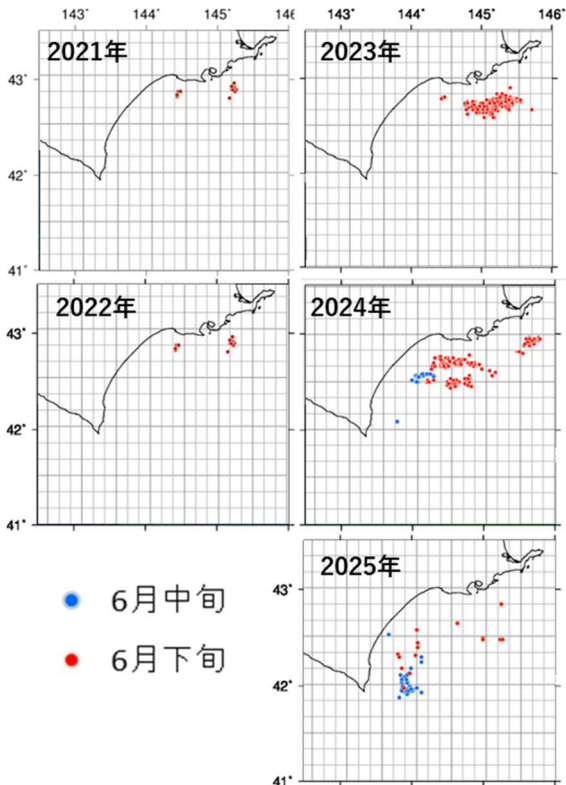


図 31. 2021～2025 年 6 月の道東海域におけるまき網によるマイワシ漁場の推移 データ出典：JAFIC 聞き取り調査

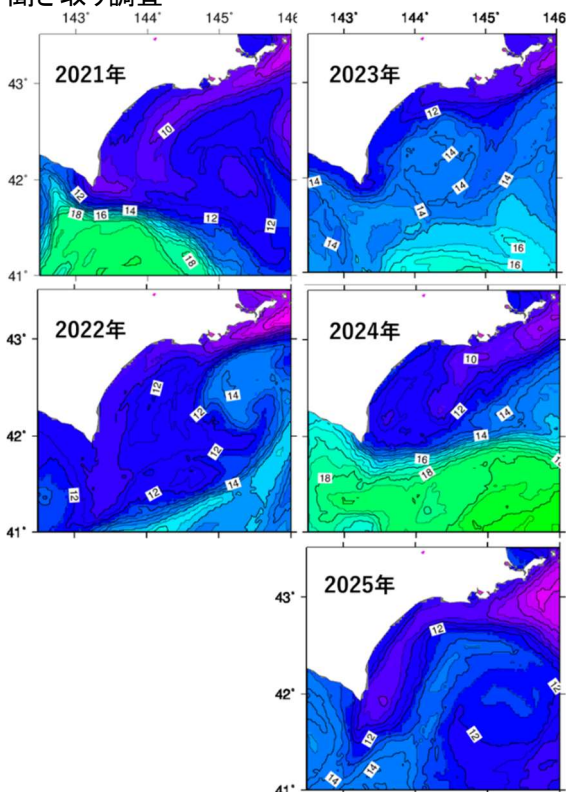


図 32. 2021～2025 年 6 月中旬の道東海域の平均表面水温 データ出典：JAFIC

本年は、6 月下旬の道東の漁獲量がまとまらなかったため、7 月上旬に漁船が犬吠海域へ南下したが、7 月中旬から再び道東海域に北上した。本年の南下期を含め、今後の海洋環境と漁場形成の動向を注視したい。

(水産情報部 源 浩輔・海洋事業部 矢野泰隆)

### トピックス2 2000～2024 年の水揚げ季節の変化

過去 10 年間で日本周辺の海面水温が急上昇し(図 33)、漁業への様々な影響が指摘されている。とりわけ、2023 年と 2024 年は三陸沖周辺と日本海中部で著しく高温であった。そこで、2000 年以降について主要魚種の全国水揚げ量(JAFIC おさかなひろばの全国主要港)の経年変動と季節変動についてまとめた。なお、2023 年までの全国および主要水揚げ港別の同様な分析については JAFIC テクニカルレビュー第 6 号<sup>4</sup>を参照されたい。

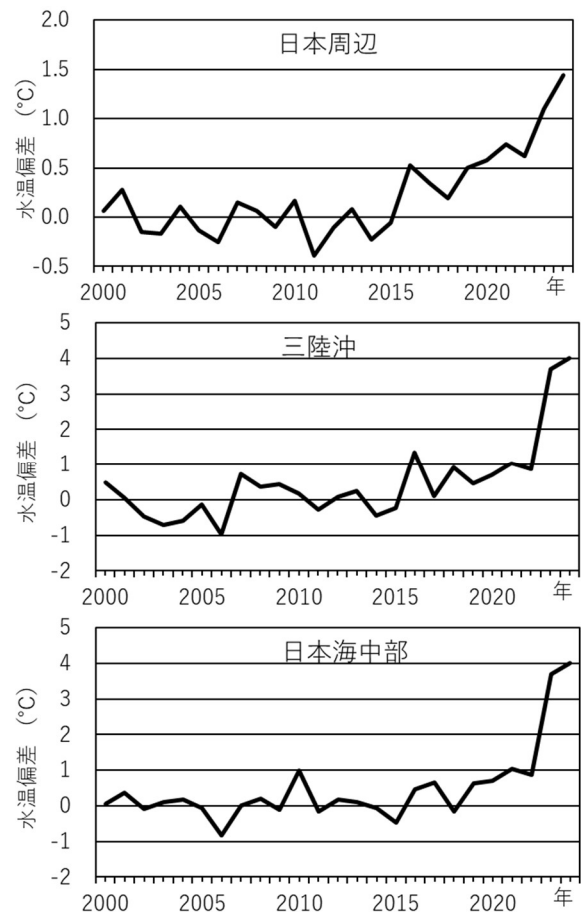


図 33. 2000～2024 年の日本周辺海域(上)、三陸沖(中)および日本海中部(下)の海面水温偏差の推移(データ出典：気象庁<sup>5</sup>) 平年値は 1991～2020 年の平均

<sup>4</sup> <https://www.jafic.or.jp/technicalreview/1359/>

[https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/shindan/a\\_1/japan\\_warm/japan\\_warm.html](https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/shindan/a_1/japan_warm/japan_warm.html)

生鮮マイワシ(図 34):全国水揚量は 2011 年から増加し始め、2015 年には 20 万トンを超え、2020 年以降は 50 万トン超で推移してきた。また、マイワシ太平洋系群の資源回復に伴い、2012 年以降は道東でまき網漁場(6~10 月、盛期は 9~10 月)が復活し、2014 年以降はロシア水域や公海域でも漁獲されている<sup>6</sup>。このため、9~10 月の水揚量が急増した。マイワシ対馬暖流系群も 2010 年ごろから回復傾向にあるが、太平洋系群に比して緩やかである。なお、主要港別の動向はトピックス 3 を参照されたい。

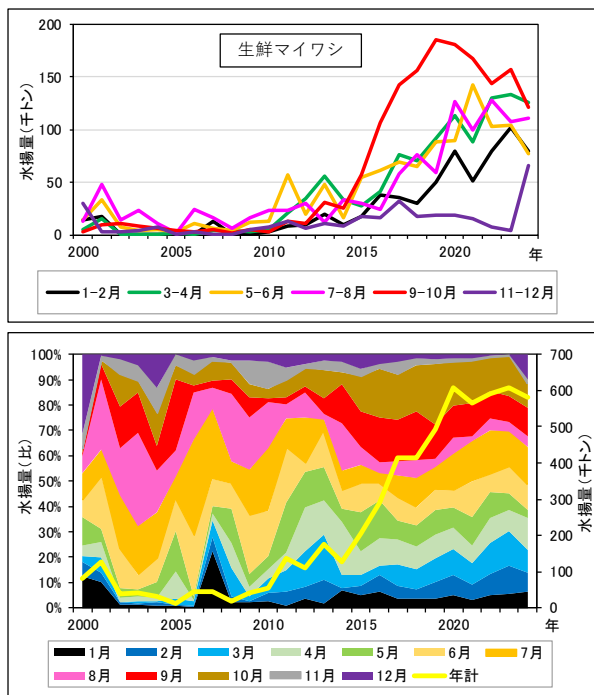


図 34. 生鮮マイワシの 2 カ月別水揚量(上)と年別水揚量と月別構成比(下)の推移

生鮮さば類(図 35):全国水揚量は 2005~2019 年に 30 万トンを超えたが、2020 年以降は徐々に減少した。2005~2019 年の好漁期においては、2010 年までは 7~12 月の水揚量が多かったのに対し、それ以降は 11~4 月の水揚量が多くなった。この一因として、水温上昇に伴い、南下回遊の時期が遅れたことが考えられる。また、2022 年以降は 3~4 月の減少が著しいが、この一因として常磐~三陸における海洋熱波に伴い、同海域が不漁となったことが考えられる。

生鮮マアジ(図 36):全国水揚量は 2000~2017 年の 10~15 万トンから徐々に減少し、2018 年以降は 6~8 万トンとなった。月別には万遍なく水揚げされてきたが、2015 年ごろから 4~5 月の割合がやや高くなった。

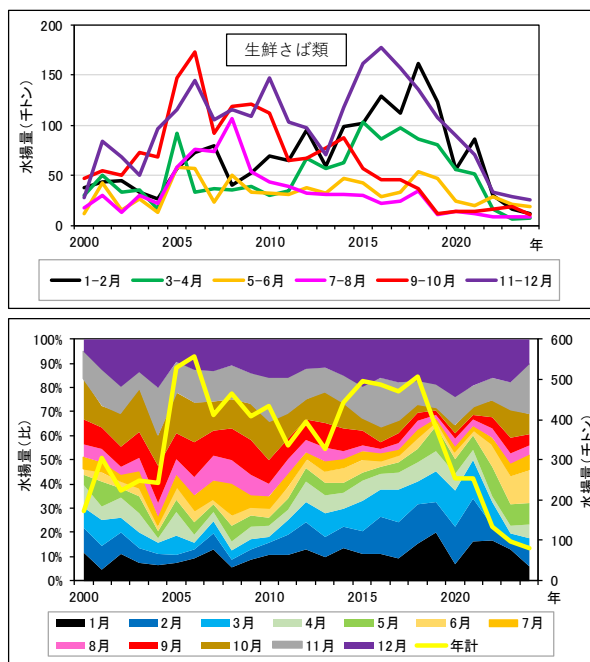


図 35. 生鮮さば類の 2 カ月別水揚量(上)と年別水揚量と月別構成比(下)の推移

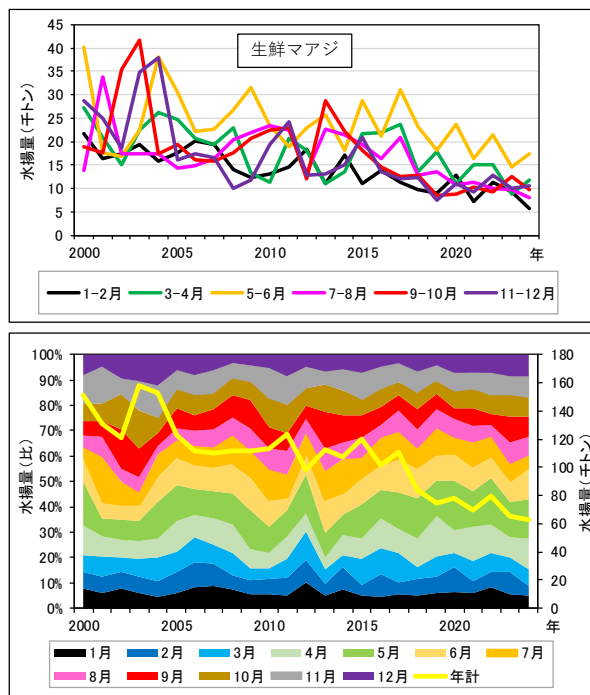


図 36. 生鮮マアジの 2 カ月別水揚量(上)と年別水揚量と月別構成比(下)の推移

生鮮スルメイカ(図 37):全国水揚量は 2000~2015 年の 6~13 万トンから急激に減少し、2021 年以降は 2 万トンを下回った。季節別にみると 7~12 月に多く水揚げされていたが、2023 年からは 9~10 月の割合が高くなった。この原因として、日本周辺の

<sup>6</sup> [https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2025/03/details\\_2024\\_01.pdf](https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2025/03/details_2024_01.pdf)

水温上昇に伴うスルメイカ産卵期や回遊の遅れが考えられる。なお、主要港別の動向はトピックス3を参照されたい。

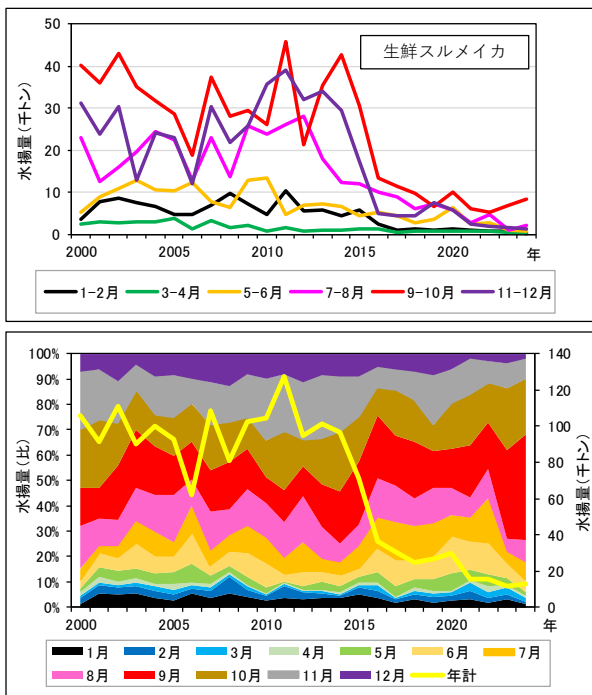


図 37. 生鮮スルメイカの2カ月別水揚量(上)と年別水揚量と月別構成比(下)の推移

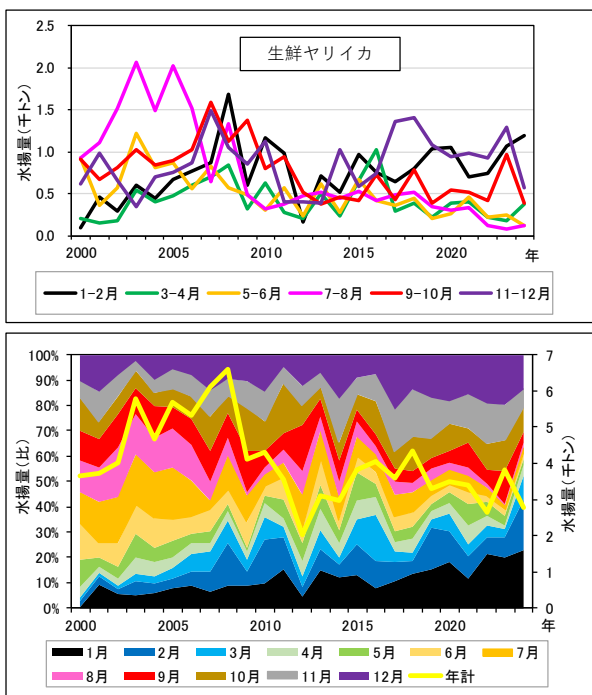


図 38. 生鮮ヤリイカの2カ月別水揚量(上)と年別水揚量と月別構成比(下)の推移

生鮮ヤリイカ(図 38): 全国水揚量は 2000~2010 年の 3~6 千トンからやや減少し、2011 年以降は 2~4 千トンとなった。季節別にみると 2005 年までは 7~8 月に多く水揚げされていたが、2006 年からは 11

~2 月の割合が高くなった。この原因として、ヤリイカ太平洋系群では北部海域(主漁期は冬季)の漁獲量が高水準で推移してきたのに対し、中部と南部海域や対馬暖流系群(主漁期は夏季)では 2000 年以降に漁獲量が減少したことが考えられる。

### まとめ

水温上昇など地球温暖化の水産資源への影響は、各魚種の分布域の変化(日本周辺では北上)、回遊時期(季節性)の変化、海域ごとの基礎生産力(植物プランクトン)の変化(亜寒帯域で増加、亜熱帯域で減少)などが知られている。日本周辺の海面水温は 2015 年頃から急上昇してきた。その前後の期間において、各魚種の水揚量が増加したもの(マイワシ)もあれば減少したもの(スルメイカなど)もあったが、水揚時期の変化は今回検討した全魚種の全国水揚量について多少とも認められた。季節性の変化は魚の旬や需給関係にも影響が大きいと考えられる。

(水産情報部 谷津明彦)

### トピックス3 2000~2024 年の主要港における生鮮マイワシと生鮮スルメイカ水揚量の季節変化

#### はじめに

ピックス 2 では、過去 10 年間で日本周辺の海面水温が急上昇したことに関連して、主要魚種の全国水揚量について 2000~2024 年の変動と季節変化についてまとめた。ここでは、2010 年代に資源量が急増したマイワシと急減したスルメイカについて、主要港ごとに季節変化の推移を分析した。

#### 材料と方法

マイワシとスルメイカの水揚量は、JAFIC おさかなひろばの値を使用した。また、各年における月別水揚量構成比は各港の年間水揚量に対する各月の割合とした。この構成比と各魚種の分布・回遊の関係を明らかにするため、以下の指数を用いた。

- ・夏季指数:  $\sum 8\sim 9$  月の各月構成比  $\div 2$
- ・越冬期指数:  $\sum 1\sim 3$  月の各月構成比  $\div 3$
- ・北上指数:  $\sum (4\sim 7$  月の各月構成比  $\times$  各月値)  $\div \sum$  各月値、ここで各月値は 4~7 の整数
- ・南下指数:  $\sum (10\sim 12$  月の各月構成比  $\times$  各月値)  $\div \sum$  各月値、ここで各月値は 10~12 の整数

すなわち、夏季や越冬期の魚群が水揚港付近に集中すると、それぞれの指数(棒グラフ)が増加することになる。また、魚群の北上や南下が遅れたり対象月の構成比が増加すると、北上指数と南下指数(折れ線グラフ)が増加する。なお、資源量と分布・回遊の情報は、主に水産研究・教育機構による令和 6 年

度資源評価<sup>7</sup>によった。

### マイワシ(生鮮)

マイワシは寿命が7年程度で、太平洋側に分布する太平洋系群と日本海～東シナ海に分布する対馬暖流系群に大別される。太平洋系群は2010年頃から資源が急速に回復し、分布回遊範囲も北方(ロシア海域)や公海域に拡大した。マイワシ対馬暖流系群も、2010年ごろから資源量が徐々に回復し始めたが、太平洋系群ほどには増加していない。また、対馬暖流系群は2014年と2019年日本の漁場への来遊量が顕著に少なかったが、その原因は良くわかっていない。主要な漁法はまき網である。以下、主要港について動向を述べる。

釧路港(図39):マイワシ太平洋系群の資源の回復に伴い、2012年から大中型まき網漁場が道東海域に形成された。道東海域の漁期は6～10月であり、初漁期の割合が徐々に増加し、漁期後半の割合が減少してきた。なお、8月は漁船の夏季休暇などにより水揚量は例年少ない。

夏季指数は2014年のピークから減少したが、この原因として、6～7月の水揚量割合の増加および9月の減少に加えて、資源量の増加に伴うマイワシ分布域の道東以北や沖合域への拡大が考えられる。実際、ロシアによる漁獲量は2016年以降増加してきた。一方、北上指数は増加傾向にあり、これは6～7月の水揚量増加によるものであり、北上の遅れではなく、道東への来遊の早期化を意味する。

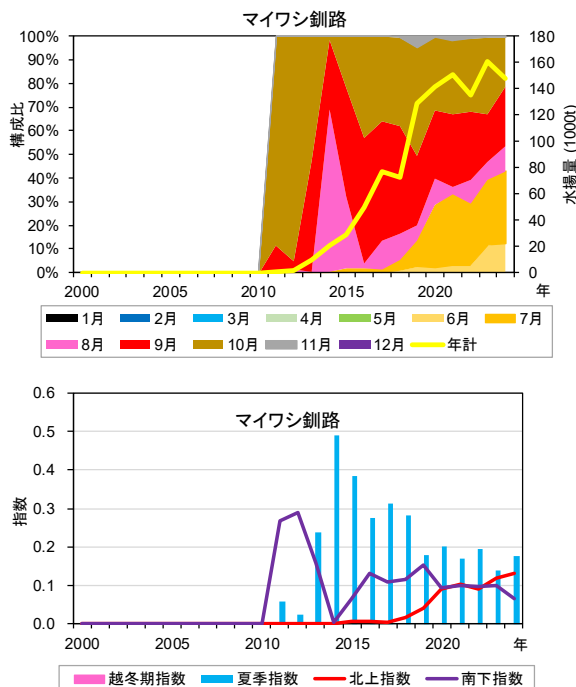


図 39. 釧路港におけるマイワシの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

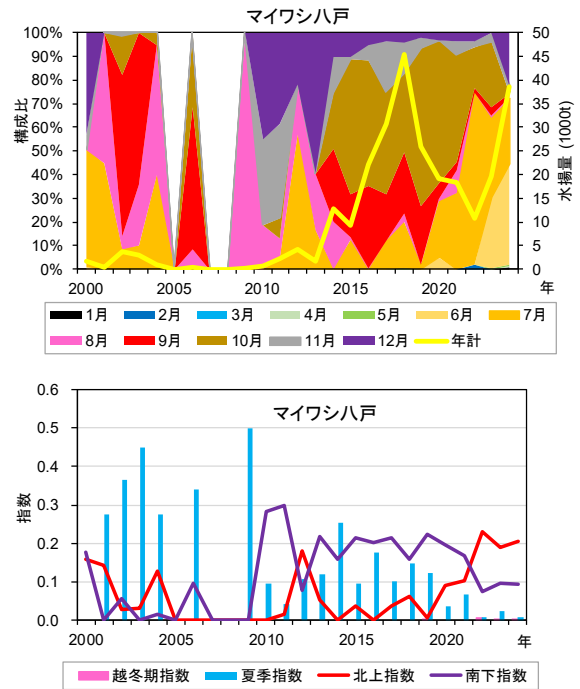


図 40. 八戸港におけるマイワシの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

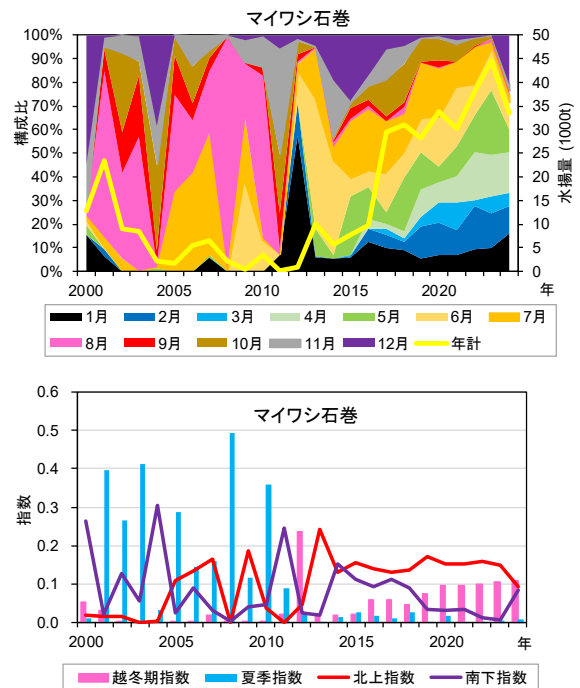


図 41. 石巻港におけるマイワシの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

八戸港(図40):八戸周辺漁場のみならず道東まき網漁場での漁獲物が水揚されることもある。また、マサバやスルメイカ資源の高水準期には、これらを対象とするまき網漁場が八戸沖に形成された。2020年頃から釧路港同様に6月と7月の水揚量割合が増

<sup>7</sup> <http://abchan.fra.go.jp/hyouka/doc2024/>

加し、9月が減少した。各指数の推移は釧路港に類似しており、マイワシの夏季分布域の北上および魚群の来遊早期化を示している。

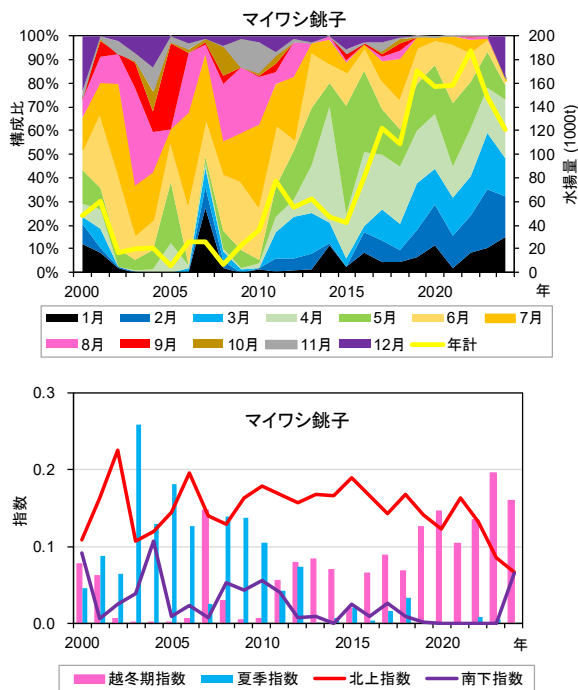


図 42. 銚子港におけるマイワシの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

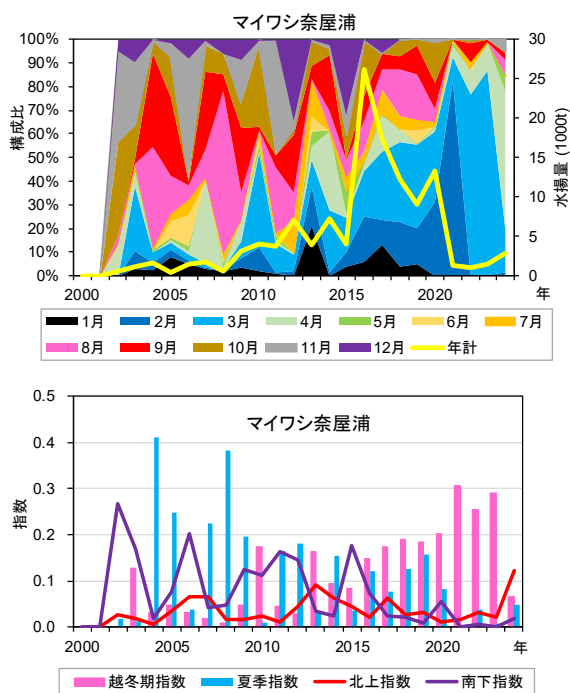


図 43. 奈屋浦港におけるマイワシの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

石巻港(図 41): 主要な漁法はまき網・底曳網・定置網である。2011 年頃までは夏季指数が高く、それ以降は越冬期指数が高くなった。これらの原因として、水温上昇に伴うマイワシの分布北限や越冬場の北上が考えられる。一方、夏季指数の減少は、マイワシ資源の増加に伴う分布域の北方への拡大も関係する。

銚子港(図 42): 各指数の推移は石巻港に類似している。但し、北上指数は石巻港とは異なり 2022 年以降低下しており、北上回遊が早期化していると考えられる。なお、これらの動向は、マサバの資源量水準が高い時代にはまき網が銚子港に大量に水揚していたことから、マサバ資源水準の影響も考えられる。

奈屋浦港(図 43): 銚子港周辺以北(北部太平洋海区)ではマイワシ魚群(大回遊型)の季節回遊に応じて、まき網船団も南北に移動するが、三重県付近のまき網漁場は中部太平洋海区(房総半島南端～潮岬)に限られる<sup>8</sup>。また、当海域で漁獲されるマイワシは、黒潮周辺の沿岸域で小規模な索餌回遊を行うもの(小回遊型)が主体である。これらにより、奈屋浦港の年間水揚量は釧路港～銚子港とは異なる動向を示したと考えられる。なお、関東～東海近海の海洋環境により、道東海域へ索餌回遊したマイワシが関東近海に南下したのち、三重県周辺海域へも南下する年もあるが、その割合は比較的小さいと思われる。しかしながら、2023 年と 2024 年を除き、各指数の推移は銚子港に類似していたことから、高水温のマイワシの分布回遊への影響は上記の大回遊型に共通していると考えられる。

境港港(図 44): 漁獲対象となる系群はマイワシ対馬暖流系群である。夏季指数は年変動が大きく傾向は不明瞭であるが、越冬期指数は 2017 年ごろから増加傾向にある。北上指数と南下指数も傾向が不明瞭である。

松浦港(図 45): 漁獲対象となる系群はマイワシ対馬暖流系群である。すべての指数で明瞭な経年変動は見られなかった。

<sup>8</sup> [http://www.fpo.jf-net.ne.jp/gyoumu/hojyoyigyo/01kozo/nintei\\_file/H](http://www.fpo.jf-net.ne.jp/gyoumu/hojyoyigyo/01kozo/nintei_file/H)

280308\_miegaiwan\_nayaura\_daityumaki\_hennkou.pdf

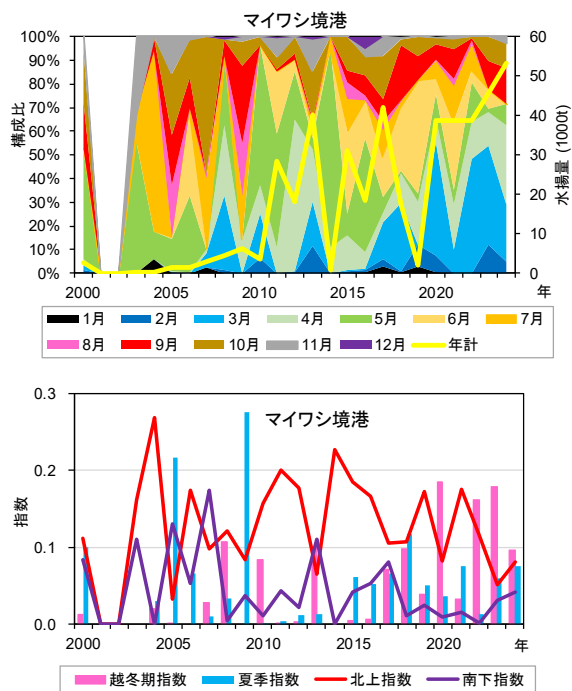


図 44. 境港港におけるマイワシの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

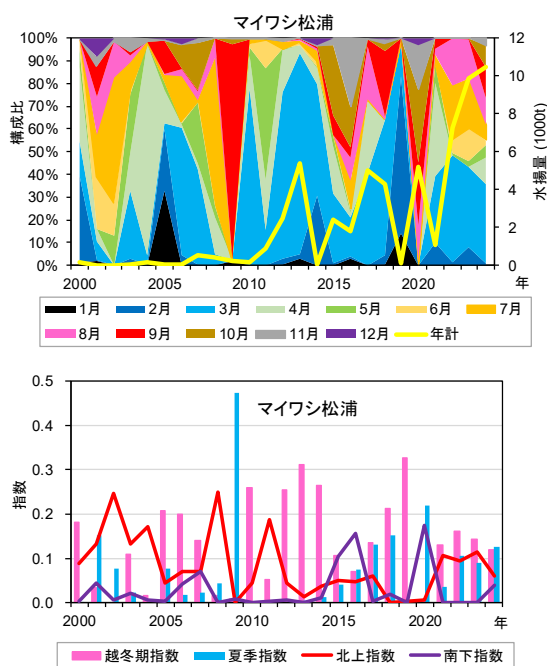


図 45. 松浦港におけるマイワシの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

### スルメイカ(生鮮)

スルメイカは寿命が1年で、秋季に日本海西部～東シナ海北部で発生する群(秋生まれ群)と冬季に東シナ海で発生する群(冬生まれ群)に大別されるが、春～夏に発生する小規模な地方群も存在すると考えられている<sup>9</sup>。

秋生まれ群は日本海に分布し、春～夏に北上し秋に南下する。冬生まれ群の幼生は東シナ海から主に太平洋側に輸送され、春～夏に太平洋側を北上し、秋になると多くは津軽海峡を通過して、秋～冬に日本海を南下すると考えられている。そのため、太平洋側は冬生まれ群が漁獲対象となるが、日本海側では春～秋は秋生まれ群、秋～冬に冬生まれ群を漁獲される。主要な漁法は日本海・東シナ海では釣りであるが、太平洋側では近年は底曳網・定置網・まき網などが増加し、釣りの漁獲量を大きく上回った。

両群とも2010年頃から急速に資源量が減少した。また、体サイズも小型化しており、これらの原因として日本周辺の水温上昇に伴う産卵場の変化や産卵期の遅れが考えられる<sup>10</sup>。以下、主要港について動向を述べる。

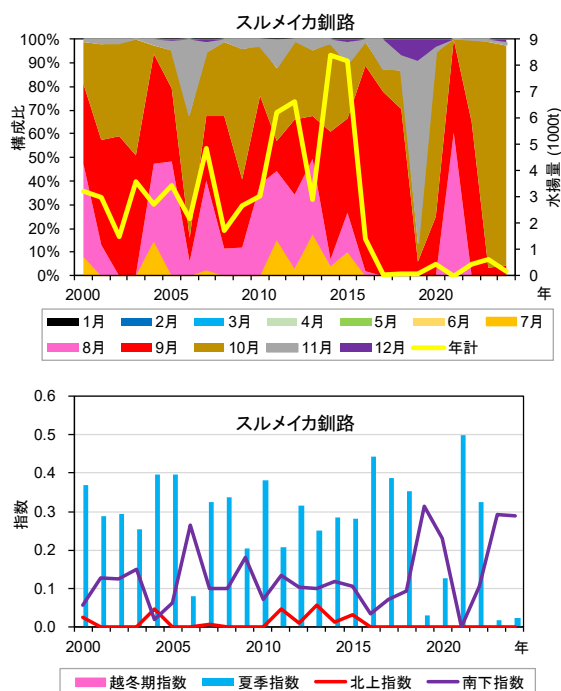


図 46. 釧路港におけるスルメイカの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

9

<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2018/11/1543300330.pdf>

10 [https://www.suisan-shinkou.or.jp/promotion/pdf/SuisanShinkou\\_559.p](https://www.suisan-shinkou.or.jp/promotion/pdf/SuisanShinkou_559.p)

df

11

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/suisan/88/4/88\\_21-00046/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/suisan/88/4/88_21-00046/_pdf)

釧路港(図 46):水揚量は 2016 年以降激減し、漁期は不安定になった。南下指数は変動が大きいものの増加傾向にあり、スルメイカ群の南下が遅れたためと考えられる。

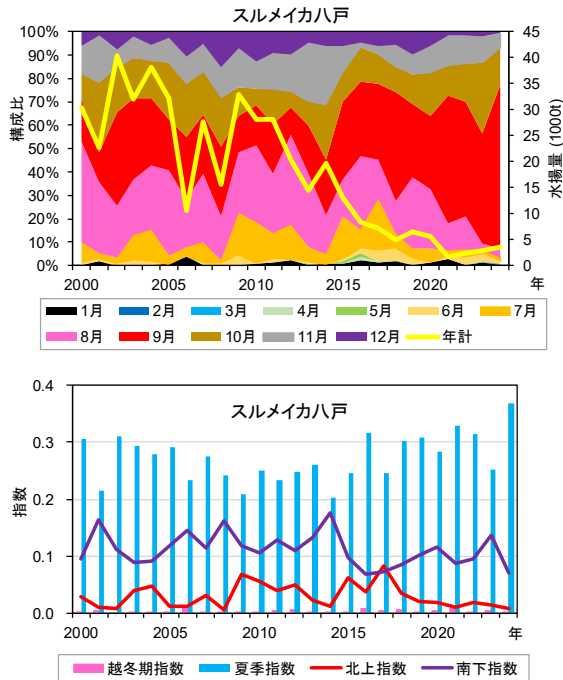


図 47 八戸港におけるスルメイカの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

八戸港(図 47):水揚量は 2014 年以降減少し、主漁期(8~9 月)においては、8 月の割合が減少し 9 月の割合が増加した。この原因は、スルメイカ群の北上が遅れたためと考えられる。なお、各指数は比較的安定して推移した。

石巻港(図 48):水揚量は 2010 年以降減少し、八戸港同様に 8 月の割合が減少し 9 月の割合が徐々に増加した。また、南下指数は 2023 年と 2024 年に著しく減少した(10 月と 12 月の割合が減少)。このことは、両年における黒潮続流の異常な北偏により、常磐~三陸海域の水温が顕著に上昇したこと(海洋熱波、図 33)に関連していると考えられる。

新潟港(図 49):水揚量は 2015 年頃から減少し、南下指数が増加した。後者については、日本海の水温上昇に加えて、スルメイカ両系群の産卵期の遅れに伴う回遊の遅れに関連していると考えられる。また、2023 年と 2024 年には南下指数と北上指数が大きく変化したが、この原因として両年における日本海中部の海面水温の顕著な上昇(図 33)が考えられる。

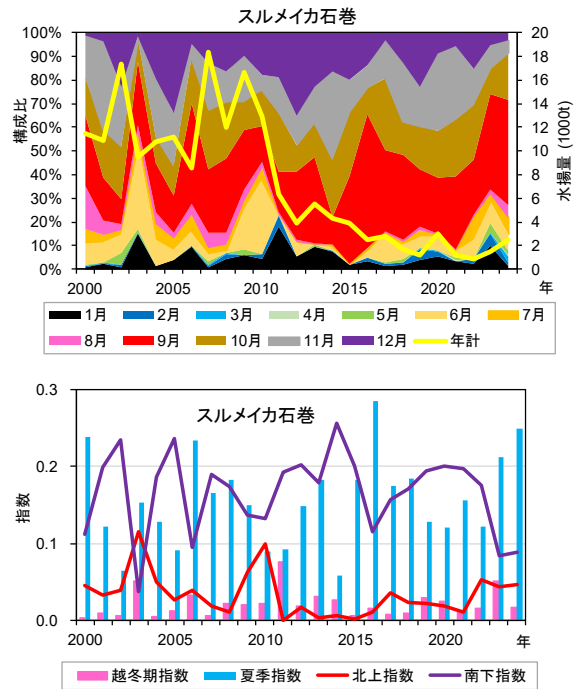


図 48 石巻港におけるスルメイカの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

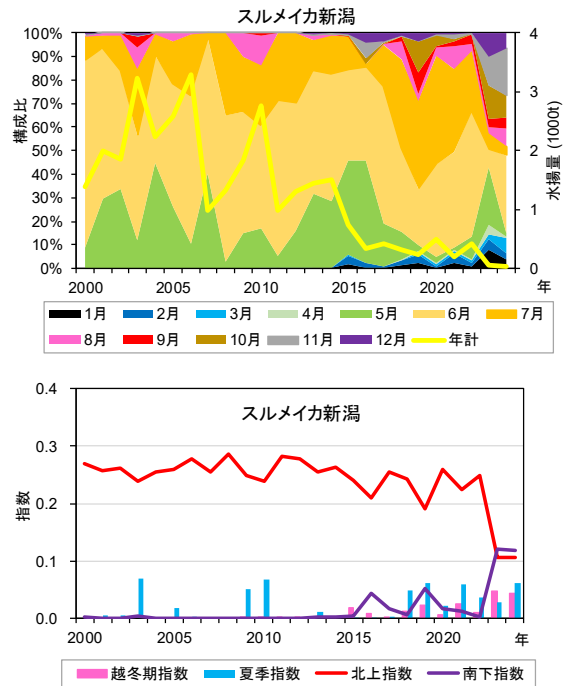


図 49 新潟港におけるスルメイカの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

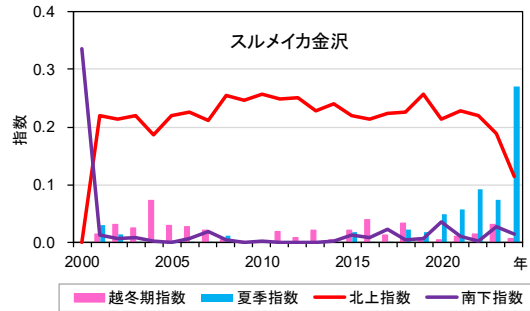
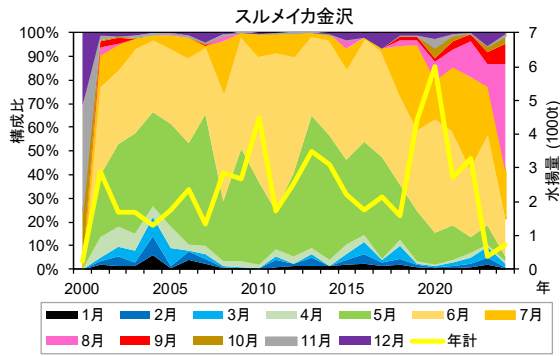


図 50 金沢港におけるスルメイカの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

金沢港(図 50):水揚量は他港のような減少傾向を示さず、主漁期は 5~8 月であった。この傾向は、石川県沿岸における小型いか釣り漁船の 1 日 1 隻当たり水揚箱数(CPUE)の推移と類似しており、この CPUE の変動要因としては、秋生まれ群の発生量に加え、能登半島周辺まで北上したスルメイカが周囲の海洋環境に応じて滞留する期間に依存することが考えられている(石川県漁海況情報 552 号<sup>12</sup>)。一方、2020 年ごろから 5~6 月の水揚量割合が減少し、7~9 月が増加した(夏季指数も増加)。これらの一因として、スルメイカの北上回遊の遅れが考えられる。

境港港(図 51):水揚量は 2008 年頃から減少し、11~12 月の水揚量割合が減少し、1~2 月が増加した(南下指数の減少、越冬期指数の増加)。この原因として、日本海の水温上昇に加えて、スルメイカ両系群の産卵期の遅れに伴う南下回遊の遅れに関連していると考えられる。また、2018 年ごろからは 12 月と 1 月の水揚量割合が減少した一方、9~10 月の水揚量割合が突然増加し、越冬期指数、夏季指数、南下指数が大きく変化した。これらの変化は、スルメイカ両系群の産卵期の遅れでは説明できず、回遊の劇的な変化や、他の季節発生群の相対的な増加に起因した可能性がある。

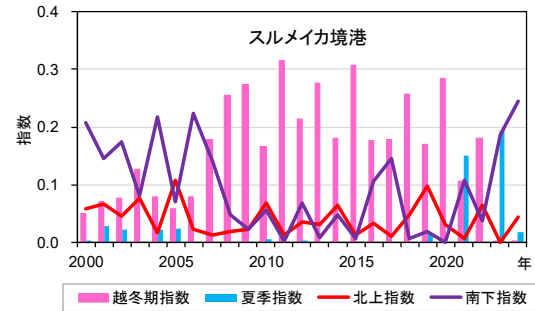
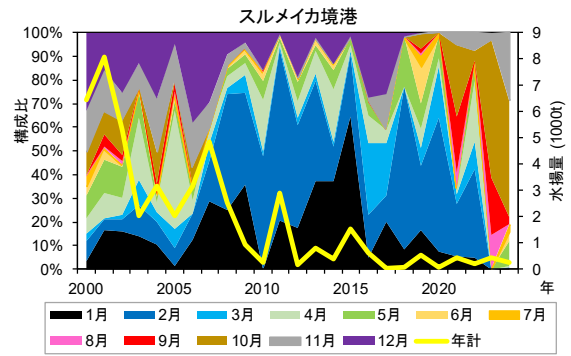


図 51 境港港におけるスルメイカの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

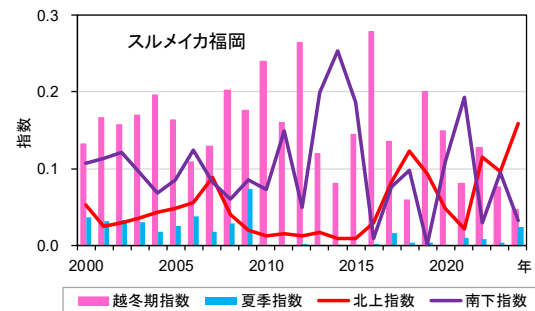
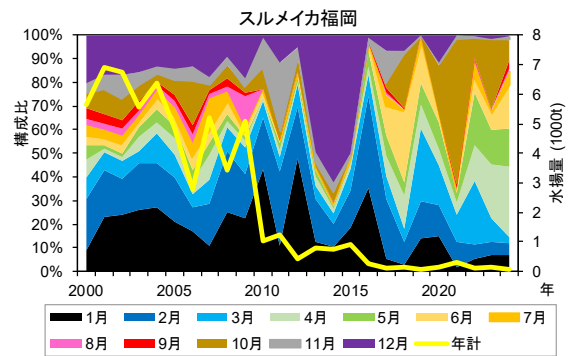


図 52 福岡港におけるスルメイカの水揚量と月別構成比(上)と各指数の推移

福岡港(図 52):水揚量は 2010 年に急減し、特に夏季に不漁となった(夏季指数がほぼゼロ)。また、2016 年ごろからさらに水揚量が減少し、各指数の変

動も大きくなり、境港港と同様に 12 月と 1 月の水揚量割合が減少し、4～6 月と 10 月が増加した。

#### まとめ

マイワシについては、資源回復に伴う分布の北方への拡大に加え、日本周辺の水温上昇に関連した北上回遊の早期化が見られた。スルメイカについては、日本周辺の水温上昇に伴う産卵期の遅れが

指摘されており、これにより太平洋側では北上の遅れ、日本海では南下の遅れが生じたと考えられる。一方、境港港と福岡港では 2017 年前後から 12 月と 1 月のスルメイカの水揚量割合が減少し、10 月が増加したが、この現象は産卵期の遅れでは説明できないため、他の要因が想定されるが、現時点では明らかではない。

(水産情報部 谷津明彦)